

第 5 章
参加者の声

浅岡 真衣

「日本に帰りたい…。」JASC 中、つらくなった時によく口にしていた言葉だ。そのたびに周りから、「ここ日本だから！」と激しいつつこみをもたらしていたのだが、あの時の私にとって、JASC は、「日本」でも「アメリカ」でもなく、どこか違うひとつの「社会」であった。日本食を食べ、電車に乗り、携帯を使い、まったく普段日本で生活するのと同じような環境にしながら、JASC は、日本ではない、何かだった。日本とアメリカがミックスしたとも言いがたい、いまだにあの雰囲気を形容する言葉は見つからない。思い出すのは、八月の蒸し暑い気候と、夜中まで語り明かし寝不足でボーっとした感覚、沖縄で蚊にさされたかゆみ（ひどかった!）、そしてみんなの明るい笑顔である。

楽しいこともあればつらいこともあった。今まで過ごしてきた人生の中で得たありとあらゆる感情を一気に爆発させたようだった。笑って、泣いて、学んで、爆笑して、苦しんで、喜んで…。そんな風は無我夢中で精一杯楽しんだ一ヶ月後、私が得たのは日米の多くのかけがえない友人である。これからも、ずっと語り合っていきたいし、気持ちを共有していきたいし、私が死んだら骨を拾ってもらいたい。私も彼らの骨を拾うつもりである。

JASC が終わってすぐアメリカのメイン州での一年間の留学が始まった。さっそく、ボストンにいる JASCer を訪ねたり、携帯やメッセで各地の友達と連絡を取ったり（アメリカでは夜 10 時以降と休日は通話料タダ）、交流を続けている。アメリカの端っこの田舎町で、孤独や不安に苛まれながらなんとか生きていられるのは、そういった、気持ちをシェアできる、本当の意味で「会話」ができる友人たちに支えられているからだと思う。これからの JASCer には、JASC という機会を生かして、思いっきり楽しんで、友達を沢山作ってほしいと思う。ああ、「JASC に帰りたい!!」

荒島 由也

最初に島の噂を聞いたのは少し前のことだった。どうやら島には面白いものがたくさんあ

るらしい。好奇心旺盛な Y 氏はいてもたってもいられなくなり、すぐさま島について調べると、手続きを済ませ島へと旅立った。Y 氏が参加したのは島への 1 ヶ月の体験ツアーだった。8 人のガイドに引き連れられ Y 氏は常夏の島で珍しい動物や変わった果物、心揺さぶられる風景などあらゆるものを堪能した。島はまるで楽園のように Y 氏の目に映った。いよいよツアーも終わりに近づくと、どうやら参加者の中から次期ツアーガイドボランティアを募集するという話がガイドの口からでた。まばゆいばかりに輝くその島を Y 氏は忘れられるはずもなかった。ボランティアに志願したのも当然だった。ガイドに就任した Y 氏はとても幸せだった。次のツアーではどんなことを企画しようか、心を躍らせた。島の自由な雰囲気を多くの人に伝えたいと Y 氏は願った。

島の異変に気づいたのはガイドを始めて間もない頃だった。楽園は暗雲に包まれ、荒れた大地が広がっていた。Y 氏が見ていた島は島のほんの一部に過ぎなかった。それも本当に美しい部分。小屋にあった島に関する資料を読みると、ツアーはマンネリ化し、ツアーを彩る玉虫色のスローガンだけが寂しそうに書かれていた。しかし、この島を魅力あるものに作り変えようという意志は Y 氏を含め他の 7 人のガイドも同様だった。一方、島の管理人は島の改革に関しては疎く、その状況に危機感を感じている様子ではなかった。呆然とした Y 氏は信じられずに島を歩き回ってみることにした。しばらく歩き回ると数十年前にツアーに参加したという人たちに偶然出くわした。Y 氏は島の現状を訴えるどころか、島の話をするのさえためらった。なぜなら、彼らはツアーをこよなく愛し、あまりにその過去にしがみついていたから。ツアーが終わってからツアーの貴重さが実感できる、という彼らの言葉には正直首をかしげた。と同時に、島の惨状を考えると以前のガイドたちがどのように島を見ていたのか、気になった。

Y 氏の担当は島のプロモーション。より多くの人に島を知ってもらうということが Y 氏の仕事であった。裁量は多く、好きなように仕事は出来たし、Y 氏は仕事自体にはとても満足していた。が、何かすっきりとしない感覚、違和感といったものがなくなることはなかった。ガイドたちはプログラムを企画すると同時に島を開発するための資金も調達してこなければ

いけなかった。ガイドたちは島のスポンサーを探すために駆け回ったが、断られる理由は常にこうだった。「あなたたちが島を魅力的だと考えるのはよく分かった、しかしわれわれにとっての島の魅力は何か。」と。島は時代の環境変化に完全に取残されて過去の伝統を大きくひきずっていた。島には崇高な理念はあっても具体的な社会にアピールできる成果はなかった。そして、島の行き着くべき方向性がなかった、これこそが島にとっての最大の問題であった。

個人的な気づきや発見は多くあったかもしれないが、島を根本的に変えることはできなかったとY氏は自分の力不足を嘆いた。それは単純に力不足であった。変革という言葉の重みを肌で知った。しかしそれは決して結果に対して満足していないということではなかった。Y氏は他のガイドたち、島へのツアーに協力してくれた全ての人たち、そして与えられた全てのチャンスに感謝し、一定の成果も残せたと感じていた。ただ、島での経験を美化するつもりは毛頭なかったし、ツアーに関する批判は大いに受け入れるつもりでいた。

常夏の島での1ヶ月ツアーがまた終わろうとし、新たなボランティアガイドの募集も始まった。Y氏はちょうど1年前を思い返して何ともいえない心境になった。島の波打ち際は相変わらず穏やかで楽園にふさわしい概観であった。大きなココヤシの樹の下にY氏は腰掛けると、陽の光を反射しながらどこまでも続く碧色の海を眺めてこう自分に呟いた。このツアーでの経験は将来貴重なものとして振り返ることになるだろう、と。

伊藤 朋子

この夏の日米学生会議を言葉で形容する事は非常に難しい。

古都・京都で、日本の慎ましくもあり艶やかな伝統を目の当たりにし「日本文化の潮」を感じた。それは、現在日本で暮らしている私にも現代とは異なる「日本の伝統」とは何なのかを再度認識する機会となった。そして広島。原爆で瞬く間に破壊され、黒い雨の降る街と化した広島を、本や教科書ではなく実際に肌で体感した時の、うちから沸きあがってくる何とも言えぬ憤りで体がカッと熱くなったこと、そして恐怖

に体が震えた感覚を今でも忘れない。常夏の国、沖縄ではその陽気で朗らかな人々の笑顔の裏に隠された悲惨な歴史を目の当たりにすることができた。戦時中の一般市民の豪内でのずさんな生活や、現在もなお続く米軍基地問題など、旅行会社のパンフレットの中に見る青々とした海からは想像もできない程の幾重にも重なった複雑な歴史を沖縄は歩んでいた。会議の最終地でもあり、私が住む東京では“中心”という言葉が頭から離れることがなかった。大企業の経営者や、官僚の人々など「物事を動かしていく力」とそのダイナミッククスを感じる事が出来た。

サイトという側面から見ただけでも、一度に多くのことを学べたまたとない機会であった。これらの体験により、政治、経済、ビジネス、そして文化という学問へ対する貪欲さが一層増したことは確かであり、今後の大学生活の糧となった。しかし、学生会議の魅力はそれだけではとどまらなかった。

エマーソンの有名な格言がそれぞれものを見事に言い当てている。

“全ての人間には個性の美しさがある”

そう、この学生会議は学問や体験という側面はおろか「人間の魅力」というものに感化され、刺激を受け、互いに理解しあひ時に衝突して、尊敬や信頼を深めていく、またとない機会だった。

この会議を形容し、言葉で表すことは私の少ない語彙力では不可能である。

しかし、今でも強く心にのこっているこの気持ちはずっと変わらないという自信がある。

“Looking Forward to looking back”

— あの頃を思い出すのが楽しみでしかない

何十年たっても、私はこの夏の出来事を大切にしていかに違いない。

伊藤 雅俊

日米学生会議の感想を、と言われると非常に難しい。この感情を正確に形容する言葉が見当たらないのだ。どんな巧みな言葉使いが仮に私にできたとしても、言葉足らずになってしまいこの感情は伝えられないと思う。今回の本会議で話し合う際の言葉の重要さや便利さは痛感したが、それでもこういうとき、言葉は不便だ。ただ、一つだけ自信を持って言えること。それは『参加して良かった』。参加前の自分には、あれほど充実した気持ちの私自身の姿は想像できなかった。

私は国籍・身分を問わず、異なるバックグラウンドを持った人たちとの交流を目的に JASC に参加した。何を考え、どんな価値観を持ち、どんな信念を持っているのか。それぞれのそれを認め合い、尊重し、影響し影響されることを望んだ。この学生会議に参加したことにより今まで築き上げてきたアイデンティティや人生観に広がり生まれ、自分がこれからしていくべき生き方の糧になると同時に、多大な影響をもたらすであろうことは間違いない。さらに、今回築かれた参加者たちや関係者たちとの交流が、これからもずっと、続いていくことを切に願う。

井上 雅章

「夏どうだったよ？」

日米学生会議が終わり、日常生活に戻ると、出会う友人皆に同じ事を聞かれる。自分の答えもいつも同じだ。

「なんというか、一言ではまとめられないな」

友人をずいぶん困惑した表情にする返答なのだが、実際一言ではまとめられない。「楽しかった」、「勉強になった」と言ってももちろん嘘にはならないが、そういう言葉でこの夏に経験したことを表現するにはなんとなく違和感を覚えて、どうしてもそういう言葉を敬遠してしまう。

文化交流という枠組みでは、勿論日米の文化の差について新たに知ったこと、理解したこと、あるいは粉碎された偏見も幾つもあったし、自分が所属した安全保障の分科会では、日本とアメリカの「平和」に対する根本的な考え方を交換することが出来たと思う。それぞれで得た経

験を箇条書きにすることは極めて容易だが、それらが自分の中で、日米学生会議というひと夏の経験の中心に座すものではないことは直感が強く教えている。では自分の中で最も大きかったことは何なのか。

それはやはり、一つ一つの小さな思い出ではないかと思う。文化の違いや、安全保障への考え方というのは極論すれば他との関わりという枠組みの中では単一の側面に過ぎず、不完全とはいえ一定の結論を得た時点である意味無機的なものに変わる。対して、一つ一つの小さな思い出は、自分と他の参加者を有機的に繋いでいる。一つ一つの瞬間こそ、お互いの考え方を知り、お互いが何を大事にし、何をしたいのかを理解するための重要なものであり、その過程があったからこそ、ここで知り合った友人たちとは、将来も何かやっていけそうな、将来に向けての可能性を感じている。だから何だと言われればそれまでだが、この有機的なつながりこそが自分の世界を広げる役目を果たしたものだと思える。ただの楽しいことなら他の機会により安く、いくらでも体験することが出来るが、自分の世界観をこれだけ広げるということは、一ヶ月、魅力的で且つ自分と違う世界を背負った人間と共同生活をする日米学生会議ならではのことだったろう。瞬間的ではない、将来に繋がる相互交流がそこにはあった。

だから、「夏どうだった？」という問いに答えにくいのだと思う。自分にとってこの夏の経験は、会議が終わった時点で完結したものではなく、その先に繋がる何かを暗示するものなのだ。友人の問いに答えるにはもしかしたら数十年かかるかも知れないが、今分かるのはこの夏はその数十年に大きな影響を与える最初の経験なのということだと思ふ。本会議の最後の日みんなが言っていた、「本当の JASC は今日から始まるんだ！」という台詞、そういう可能性の世界を開いた夏だった。

井上 裕太

今でも、その光景をくっきりと思い浮かべることが出来る。僕たちは夜の広島を歩いていた。時折吹く夜風が焼けた肌に心地よい、静かな夜更けだった。街灯の下、整備された街路を広島城へと向かう。昼の間ジリジリと照りつけていた陽光の名残か、アスファルトが熱を持っているようだった。歩くうちに汗ばんでくる。

Alex はこう言う。「うまく説明できないけれど、この街には、特別な何かがある。Yuta も感じる？バスの中から、何かを感じていたんだ。」それ以上何も言わなかったけれど、彼は全身でその「何か」を受け止めようとしているみたいだった。

誰もいない夜の街は、僕たちの一体感を増幅させる。世界に僕たちだけが取り残されたかのように。様々な会話が僕たちの上を通り過ぎる。東京とニューヨークはどちらが大きいのか。互いの文化への憧れ。民族と言語、アイデンティティ。彼らはこの夜の礼にアメリカを訪れた際の案内役を約束してくれた。

ふと、どこかで見たことのある場所の中にいることに気づく。川と、その上に架かるクロスした橋。僕は隣で軽やかに歩いていた Charlene に告げる。「エノラ・ゲイは、この橋を照準に、原爆を投下したんだ。」彼女は立ち止まり、辺りを見回した。見開かれた大きな瞳から、涙がこぼれた。

そして彼女は口を開いた。「私は平和を愛している。原爆を落とされた人びとの苦しみを思うと、悲しくてたまらない。」僕は言う。「でも、アメリカでは原爆を肯定する人びとが多数派だと聞いているよ。戦争を終わらすためには、仕方がなかったんだって。」

「そういう人びとも確かにいる。」彼女は即座に答えた。そしてこう続けた。「でも、それがすべてじゃない。最近、アメリカでも平和を愛する人びとが増えてきている。原爆の是非についても、意見は半々だ。」

僕は疑問をぶつける。「でも、ジョージ・W・ブッシュは戦争を続けている。そして、彼は再選した。」彼女は悲しそうに言う。「その通りだ。でも、これだけは覚えておいて欲しい。彼はアメリカの多数派を代表してはいない。絶対に。」

しばらく、皆黙って歩いた。それぞれが、今この時に感じていることを胸のうちで反芻した。お堀に架かる橋を渡ると、大本営跡があった。天皇直属の最高軍事司令機関が戦時中この場所にあったこと、それが広島に原爆が投下された理由のひとつであることを伝えた。そして階段を上がる。

息を呑んだ。夜の広島城は美しかった。かすかに街の明かりを受け、暗闇にその姿を浮かび上がらせている。戦後再建されたこの城は、以前のものよりも一回り小さい姿でここに立っているらしい。だが、絶望と混乱の中からこの

街の復興を見つめてきたこの城は、優しさと寛大さを持って、僕たちを包み込んだ。

彼らとともに過ごした 2005 年の夏を、僕は忘れられそうにない。

加藤 康広

日米学生会議
世界平和は太平洋の平和に、
太平洋の平和は日米の平和にある。
その実現のために学生も一翼を担うべきである。
1934 年創立時のこの理念と信念は、
2005 年現在においても、継続する理念と信念である。

第 57 回日米学生会議
共に創る明日 ～戦後 60 年を今日振り返る～
Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-
America Partnership

戦後 60 年を振り返りはしなかった。
明日を共に創ることはなかった、できなかった。

人生は一度。
チャンスは一度。
今、
今この一瞬は一度。
いつかはない。
参加者 76 人が
今を生きることができたら、
参加者一人一人が
精一杯、今を生きることができたなら、
第 57 回日米学生会議、
戦後 60 年を今日振り返り、
共に明日を創れただろう。

日米学生会議が創立された 1934 年から 2005 年までの 71 年間、
世界平和は、
一度も、
訪れたことはない。

唐澤 由佳

私の部屋の本棚に並ぶ2冊の本。一冊は、留学中に友人から薦められたもので、もう一冊は、本会議中にこの本を貸したアメリカ側参加者に紹介してもらったものだ。先週読みを終えたばかりだが、頁を捲るごとに、ああ彼女とこの本について話したい、そう感じた。今振り返ると、この夏いかに自分が幸せな環境にいたかを改めて感じる。

日米学生会議の間、何かについて話したいとき常に誰かがいてくれた。

滋賀で環境問題について考えたとき、京都で伝統的な日本の美しさに触れたとき、神戸で地震の恐ろしさと残された人々の傷を知ったとき、広島で原爆ドームを前にし、平和記念公園で慰霊の気持ちと平和への願いを込めて折り鶴を捧げたとき、沖縄で地元の方々温かさに包まれたとき、自分ひとりでは抱えきれない思いを分かち合ってくれた参加者達。「ねえどう思う？」と問いかけると、必ず何かを返してくれた参加者達。

何かについて一生懸命考えて、それを伝える相手がいる。受け止めてくれ、相手も意見を言ってくれる。国籍も、言語も、文化も、育った環境も異なるが、互いが互いを尊敬し合い、意見を share できる場所、それが日米学生会議なのではないだろうか。

80人の参加者と約一ヶ月間の共同生活を通して、学生達は、携帯電話の画面から顔を挙げ、日米の参加者と対話を重ねざるをえない。ほんの少しのミスコミュニケーションが、思わぬ誤解や大惨事を巻き起こしかねないと悟り、日常生活レベルでも、相手が分かるように説明する努力をし、相手の意見に注意深く耳を傾けるようになる。日米学生会議はそんなトレーニングの場でもあった。

今会議の「戦後60年を今日振り返る」というテーマのもと、もう一つ強く感じたことがある。

会議において、戦争体験者や被爆者の経験を直接伺うことができた。21世紀を迎え、私達は、インターネットなどを通して膨大な量の情報を得て、あらゆることを疑似体験できる時代に生きる。しかし、「知っている」ことは増えても、実感できることは少ないのではないだろうか。悲惨な経験が込められた戦争体験者や被爆者の方々の言葉は、時代や、国籍を越えて、私達の胸に突き刺さった。だが、今後、戦争体

験者の方々の高齢化により直接彼らの言葉を聞ける機会も少くなる。平和な時代に育ち、戦争を知らない私達は、次世代にどれだけ力強く、彼らの体験や平和への願いを伝えることができるだろうか。たくさん情報があるからこそ、戦争や災害の映像を見ても、次第に慣れてしまい無関心になっていないだろうか。

最後に、今会議を振り返ってみて、これまで積み重ねた経験の延長線に日米学生会議という選択肢があったことを嬉しく思う。先に述べた、友人が繋いだ2冊の本は、私にとってまさにこのことを象徴する。来年新たな一冊を本棚に並べることを楽しみにしながら、今後踏み出す一歩が、日米学生会議で得たものを反映したものであることを願う。



木原 由貴

After JASC syndrome、JASC が終わり福井に戻って3日間寝続けた。まさに JASC から現実世界に戻り時差ボケのようなものに悩まされていた。これから JASC を知るようになる人のためにも、そしてなにより自分のために、この一ヶ月間一人のジャパデリが何を吸収し吐き出してきたのかをここに記したい。参加が決まってから本会議までの三ヶ月半は、喜び・興奮・誇り・あせり・緊張・不安など複雑な感情が混在していた。その中でも東京での勉強会に参加できない、他のデリと会う機会も極端に少ない、自分の英語力、知識で会議を通して何か自分から発信できるものはあるのかという根本的な不安がやはり大きかった。そんな中で多くのことを経験するチャンスを与え、素晴らしい仲間に出会わせてくれ、自信を与えてくれたのが 57th JASC である。

私にはお互いに常に励まし合い、尊重し合い、そしていろんな考えを披露し？タレントを見せつけあった？多くの仲間がいた。今までにあれほどポジティブな人間に78人一斉に出会ったことはない。それぞれがまったく違ったバックグラウンドを持ち、今まで様々な道を歩んできた。そして今、それぞれの夢に向かって歩んでいる。78人すべての人生がわかったわけでも、夢を知っているわけでもないけれど、みんな輝いていた！と確信できる。みんなの話を聞くたびに自分もがんばろう！私にもできる！という勇気がわいてきた。同時に「この子がこれからやろうとしていることをできる限りサポートしたい。」「きっとこの子は何かやる、その過程を見ていたい。」と思わせてくれる友達が多くできた。これは今までの私の人生ではほとんど得られなかった感覚とっていいだろう。

JASCでの数多くの経験もまた大きな宝となり、これからの私の人生の原動力となった。その中でも三点取り上げたい。一つ目はデリスタッフとしての経験である。滋賀サイトでは環境プロジェクトのデリスタッフとして春合宿以降活動した。このプロジェクトを通して自分が得たもの、それは動かなければ何も始まらないということ。そして他のメンバーと自分の役割とのバランスのとり方である。他のデリスタッフとの協調性、他のデリをいかに取り込むか、これらは80人という大所帯を動かす上でとても重要になってくる。これに関しては実行委員長をはじめECに頭があがらない。二つ目が広島、沖縄での経験である。この二つのサイトは私個人として最も多くの発見があった場であり、知識、歴史、現実、そして感情が幾重にも重なり消化不良に陥った場である。広島、沖縄といえば誰もが原爆・戦争を思い浮かべるであろう。私たちはこの地で戦後60年たった今、改めて、いや私たちの多くにとっては「初めて」歴史を、現実を見ることとなった。広島を訪れるのは二回目であったが、今回は三年前に一人で訪ねたときとは大きく感じるものが違った。アメデリと一緒にだったということ、広島が加害者でもあるということを改めて気づかされたこと、戦後長い年月が流れた今平和教育がとても重要であるとともに、まだまだ困難を極めているということ。これらが私の変化の大きな要因であったと思う。次の沖縄では、教科書上でしか知ることのなかった、いやそれ以上の「沖縄戦」について多くの方の話を聞き、壕に入って身をもって感じ、さらに今なお続く基地問題を

を目の当たりにした。沖縄は観光地だという意識は、私の中で初日に消え去った。沖縄で見たものは悲しくつらいものばかりではない。沖縄の人の強さ、そして「いちやりばちよーでー」（一度会ったらみな兄弟）の心を強く強く感じた。広島でも沖縄でも「憎む」という言葉が聞かれなかったように思う。人々は私たちの想像を絶する経験をしてきた。しかしそこには「憎しみ」よりも「希望」が大きくそしてしっかりと根付いていた。私はこの二つのサイトを通して、人の強さ、人と人とのつながりの大切さを知り、さらに私たち若い世代が「平和」を背負っているということを痛感した。

福井からの参加者、というか地方からの参加者はほとんどいなかった。そこで自分自身が「田舎もの」であり、東京からの参加者が「都会人」というレッテルをはってしまうこともあった。22年間福井に育ったことや、田舎をいやだと思っただけのことではない。ただネットワークを作るにも、なにかやろうとするのも小さな町では難しいということを感じていたからだ。けれど自分で作ったこのレッテルはいずれ剥がれ落ち、JASCが終わるころには少しばかりの自信がついていた。「田舎もの」として、そして一人の「木原由貴」という人間として。このJASCの1ヶ月を通して自分自身の幅を広げることができたからだと思う。そしてこれは私一人では決して成し得なかった事である。JASCを通して出会った多くの人に心からのお礼を伝えると同時に、これからここで吸収したことを還元していくことをここに誓う。

キム ビヨンス

文化的背景や育ちの環境、あるいは異なる言語を持っている異国のの人々と自分の意見や価値観を交換したり調律したりする活動は、いつも私を楽しませてくれる。生き方や考え方が違う人との話し合いは、今まで自分が経験したことのない世界を味わう魅力を抱いているからだ。しかし、このような過程が思ったとおり順調に進む場合は非常に少ない。なぜならば、たやすく譲ることのできない思考の臨界点で、今まで自分がこだわってきた固有の考え方や世界観を自ら否定しなければならない状況に必然的にぶつかるからである。逆説的に私はこのような自己否定のところでカタルシスを感じながら楽しむ人である。これだけの簡単な叙述

でも、JASCの本会議が私にとって帯びている意味を察することができるだろう。

しかし、JASCの期間中に味わった楽しさはこれだけで止まらない。苦手な日本語と英語で作れ出すおかしい話し方に、いつも耳を傾けてまじめに受け取ってくれた日米の友達の瞳は、私を感動させるに十分だった。一ヶ月という決して短くない時間の中で、韓国人という曖昧な立場からありうる不便さや疎外感などを一回も感じられなかったのも、日米のメンバーならではの深い包容力があったからだと思って感謝する。広島での平和教育や沖縄で講演を聴いて、それに関しての感想が感情的な民族主義に引張られることなく、自分の中でひたすら世界平和というコードにつなげたことも、多様な意見と価値を尊重するJASCerの成熟さに囲まれていたから可能だった。特に僕は、論争が激しく起こるラウンド・テーブルのディスカッションからクーラーで部屋の温度を設定する一般生活の場まで、物事をみる両国の食い違いで何回も葛藤したことを覚えている。それにもかかわらず、結局そういう差をユーモアとウィットで乗り越えたメンバー一人一人の柔軟な態度は注目に値する。この会議を100パーセント楽しもうという最初の決意と違って、本会議のうち気分がさっぱり晴れなかった原因は、英会話力を初めいろんな面で実力が足りない自分の弱さと鮮明に出会ってからであった。しかし、与えられた課題をやりぬくために熱心に協力しているみんなの姿が互いに無言の力になってくれたので、また新しく勇気が湧いてきたことも今ここで告白する。

一応本会議は終わってしまった。しかし、僕らにはこれから一緒に成長していく友達がいる。また、これから国際社会にいろんな形で活躍し貢献していく友達と自分の未来をスケッチしてみるもう一つの楽しさも持っているはずだ。そして、それらを実現するためには多くの努力が求められるという事実も参加者みんながしみじみ感じているだろう。蒸し暑かった2005年の真夏、日本列島で結ばれた日米の絆が、これから参加者各自の心の中で大事な芽を吹かせてゆくことを願ってやまない。最後に、一生記憶に残るようなよいプログラムを企画してくれたECに、そしてそのキャンパスのうえに素敵なお絵を描いてくれた57回のおみなさんに、心から感謝する。

国松 永喜

私「だからやらないって言ってるだろ。何回言えばわかるんだよ。」

デリア「なんでやらないの？」

私「なんでやらなくちゃならないんだよ？やる理由があったら迷わずやるけど、やる理由が特に見つからない。」

これは58th、つまり来年のJASCの実行委員を決める選挙の、立候補者締め切り10分前の会話である。

思い返せばこの一ヶ月間、思うように英語で自分の意思が伝えられない苛立ちと、たったそれくらいの事で深く落ち込んでいる自分に対する情けなさで毎日逃げ出したかった。言葉の問題に加え、全く異なる価値観を持つ人達との対話の中で、自分の強く信じていたものが大きく揺さぶられ、日に日に私は言葉を失っていった。

会議も終盤に近づくに従って、必然的にデリアの間では密かに次期実行委員には誰がふさわしいのかについて、そしてこのJASCで一体何が得られたのかについて、毎晩のように語られ始めた。

私は、話がそのような方向に向かうと意識的にその場から離れようとしていた。何故なら、一刻も早く会議が終わる事を願っていた私が、来年も参加する、いやむしろ積極的に作り上げていかなければならない立場である実行委員に立候補する可能性など全く無かったし、この会議で得られた物など何一つ無いと自分自身の中で勝手に決め付け、JASCの存在意義すらに懐疑的であった私は、次期実行委員に誰が選ばれようと全く無関心であった。

そんな私の頑なな心を動かした数人の友人達がいた。

三谷 (みっちゃん)

「エイキ(私)は実行委員に必要な存在だ。全員が突っ走るばかりでは組織は成り立たない。バランスとして無くてはならない存在だ。」

波多野 (はたこ)・島村 (ジュゴン)

「エイキと一緒に働きたい、一緒に58th JASCを作りたい。」

山田 (フィリップ)

「お前とじゃなきゃ俺はやりたくない。お前とやりたい。」

幼い頃から、リーダーとしての役割を担うことで、集団の中に自分の存在意義を見出してき

た私にとって、今回の JASC において自分が果たした役割は、自分にとっても周りにとっても決して満足のいく内容ではなかったはずだ。その事こそ私が深く落ち込んでいた理由の一つであったのにも関わらず、こうして共に過ごした一ヶ月間の中で、私の新しい一面を発見し、居場所をくれ、暖かく迎えてくれた仲間達があった。

実は、私はこのように言ってくれる仲間を待っていたのかもしれない。

こういう言い方をすると、私は非常に受身な人間であるように聞こえるかもしれないが、これから更に一年間、一緒に JASC を作りあげていく仲間に妥協はしたくなかった。他の誰でもいい誰かの代わりはしたくなかった。

JASC も終わり数日が経ち、今改めて振り返る。自分が何を得られたのかについて。

知識？ 英語力？ 思い出？ いや、それよりももっと深い部分、言葉にするのは難しいが、確かに自分は変わった。どうしようもない苛立ちの中で見えにくくなっていたが、価値観の異なる人たちと集団生活をする中で、許す事、与える事、そして思いを形にするために声をあげ、動くことの大切さを学んだ。

しかし何よりもこの一ヶ月間、自分でも気がつかなかった自分を発見してくれ、そして立候補者締め切り 10 秒前に私を感動させ、奮い立たせてくれたみんなこそが私にとっての一番の宝物だ。

最後に選挙のスピーチで言った言葉、偽りの無い、心の底から自然に出てきた言葉をもう一度みんなに言いたい。

「I don't want to say good bye now, I want to meet you again !」

だから私は JASC にもう一年残る。みんなとつながってられるように。

佐藤 愛

「まじめに修学旅行」

今回の Jasc をひとことで言い表すと？ ともし聞かれたなら、私は迷わずこう答える。まじめに遊んで大いに悩み考えた 1ヶ月。学生としての醍醐味がまさに凝縮されていた気がする。

初めて JASCers と出会ったのだが、5月の初めに催された 2泊3日の春合宿だった。正直なところ、最初は逃げ出したい気持ちでいっぱい

だった。あまりにも足りない知識量、経験、周りの個性に圧倒され、日本語ですらまともに発言できていないのに、それを英語で1ヶ月となるとやっていく自信はなかった。私が唯一持っていると思われたのは高校時代をメキシコで過ごしたという経験くらいで、しかしそれも同じように海外で生活をしてきたような子が多い Jasc では、何の特別な意味をもつものではなかった。Jasc の中での自分の役割、貢献できるものを持たないうえ、むしろ会議の足をひっぱる傾向にある自分に対し否定的な気持ちでいっぱいだった。正直なところ会議中も何も持たない自分、空虚な自分に自信がなくなり、つぶれそうになったときもあったが、周りの人の助けや、自分自身変わりたいと強く願ったことで、こうなったらいちから勉強させてもらおうとある意味開き直りというか謙虚な気持ちになることができた。そして、自分の考えられたことを口にする勇気を少し持つこと、それが今せめてもの私のできる貢献だと思いそれが当面の私の課題となった。本会議中やはり言葉の壁は大きかった。なかなか言いたいこともうまく伝わらない状況の中、すれ違いも多く何度もコミュニケーションの壁にぶつかったが、自分をさげだし素直になる勇気をもつこと、そして相手の言葉を通して想いを理解しようと努めることでそれをだいぶ乗り越えられた気がする。そして人は思いがけないほどあっさりとした私を受け入れてくれた。ここでふと私が気づいたのは、今まで受け入れられていないと思っていたのは、ことばの壁があるのも事実だがそれ以上に自分からここに壁を造ってきたからであり、けっして言葉のせい、ひとのせいではなかったということだ。

会議は私にとってあるいみ精神修行の場みたいだった。本当に日々鍛えられた。弱い自分をさげ出し、ぶつかって、泣いて、笑って、わらって、、一年分の感情を出しきった感がある。でも、そうでもしないとあのつわものたちには通用しないのである。それに気がついたときから、私はより話すその人から湧き上がってくるこえとか想いの温度とかで話をするようになった。もちろん、話す中身にも気を配るがそれと同時にそれをその人がどんな風に心でとらえ、言葉という型に流し込んでいるのかを気にかけるようになった。すると、いろんな声が聞こえてきた。揺らぎない自信に満ち溢れた声、自分を弁護する声、相手を非難する声、励ます

声、慈しむ声、そのひとつひとつがその人自身であり、尊い言葉の欠片たちだった。その声に気がついたときから私の日米学生会議は今までの数倍たのしくなった。こんな魅力的な人の集まりにいることのできる自分をこころから幸せに思った。だから、どんなことをしたって楽しいのである。かといって、枕投げをすることだけがけっして楽しいわけではない。その楽しみはやはり人との会話にあったような気がする。一緒にただ歩きながら話をするのも楽しければ、まじめに議論するのもいい。グラス片手に語り合えばその楽しさはまた格別だ。

自分を見つめなおすことで私は今回、人のことを少しだけ考えられるようになった気がする。人の声を聴く。この大事なことに気がつかせてくれた全ての友人たちに感謝したい。そして、今回この私にはもったいないほどの経験ができたのも EC をはじめ、数え切れない人々のおかげであり、いつか自分が貢献できる立場になったときに今度は社会に向けて何か恩返しできればと思った。

私の日米学生会議はまだ始まったばかりである。

佐藤 広大

一ヶ月にわたった日米学生会議が終わってしばらく経った。本当は会議が終わってすぐに感想文を書こうとしたのだが、すぐさま全てを思い返して文章にすることはなかなか難しい。会議序盤は思ったことをノートに書きとめていたが、頭で考えるよりも肌で感じたほうが深く残ると思い、途中からそれをやめてしまったからである。

自分の参加動機から振り返りたい。57回を選んだ理由でもあるが、日本国内をもっと知りたいということが大きかった。特に沖縄を見てまわられたのは非常によかった。海外にばかり目を向けて身近な問題をおろそかにするのは恥ずかしいことかもしれない。誰だって大きな舞台で活躍したいと願うものだが、自分で決めた一定のフィールドでがんばるのも悪くないだろう。他には、アメリカの学生も含めて、様々な議論をする中で受けた刺激を持ち帰り今後の糧としたい、という漠然とした思いもあった。実際、普段違う場所で暮らす人々と有意義な話ができた。さらに、議論を超えたところで個と

個の前向きなぶつかり合いが多くあったことも付け加えたい。集団というものについて多く考えさせられた。こういったパワーを社会にぶつけていければよい結果が待っているのではないだろうか。



ザン リンダ

Upon first arriving at JASC, skeptical, idealistic, and passionate students alike see it as merely a short, one-month summer program that, though has the potential to influence their views on US-Japan relations, is nevertheless only one of the many experiences throughout their lives. However, only a rare few ever leave JASC having not come into contact with inspiring peers, undergone memorable lectures, or left with a very much altered and fine-tuned sense of life and purpose. This year's 57th JASC was no different.

As the only American representative on the Japanese Executive Committee, I have found myself in countless number of instances where due to language barriers, cultural misunderstandings, or differences in philosophies, I held views and ideas directly conflicting with those of others. In the ways that I have come to work through these differences and learned as a result of them, it is my belief that similarly, all of the American delegates have learned from any arguments or disagreements they may have had with the Japadeles this summer. Essentially, JASC is not a happy free-floating world of quixotic concepts, but grounded in the practical yet actionable real world. It is for this reason that there have been conflicts this summer. But it is also for this reason that these conflicts have been some of the most important events to have taken

place this past summer.

There is an American saying that cautions, "You cannot begin to understand another person (and thus should not judge them) until you have walked a mile in their shoes." As someone who saw the entire planning and execution of an event where 80 American and Japanese students, as well as 9 Chinese students, traded shoes to traverse down what often became difficult and obstacle-ridden paths, I am most grateful for the energy, enthusiasm, and openness of each and every one of our participants. It is indeed heartening to see that as much time and effort the Executive Committee members have put into planning this event, the final and most important concluding steps were taken and can only be taken by the participants themselves. Thus, in each tear, each belt of laughter, each sparkling smile I saw rays of hope and promise for the future. Lectures, field-trips, and conferences remain only events unless its participants give them meaning. The eagerness with which JASCers processed the large flood of information given to them, and extracted from it jewels of knowledge and understanding, is what gives JASC its power. It is then the passing of this opportunity and the continuation of this energy from one JASC to another that gives this conference its unique life-force.

In conclusion, while I have certainly gained personal convictions and a renewed sense of purpose from this past summer's JASC, I am more grateful for the comprehensive impact this JASC has had on 80 other students this year and many more in the years to come. Thank you for a wonderfully successful JASC.

重原 由佳

今までの20年間は、流れに身をまかせていれば自然に素晴らしい人たちがいる場所に連れて行ってくれた気がする。田舎でなんとなく生きてきた私が、JASCに出会い、JASCを通して素晴らしい人たちと合うことができたのは、私の実力の結果ではなく、すごく運がよかったとしか言いようがない。

そういう意味において、JASCは、私の今までの20年間のクライマックスだったような気がする。JASCという歴史も知名度もある舞台で、

実力・知識・経験・・・何もない私は、ただ立ち尽くすのみで何もできなかった。自分の至らない点や足りない点が一斉に浮き彫りになって、それらを隠す術もなく過ぎていった1ヶ月だった。

だからこそ同時に、JASCは、私のこれからの20年間（もしかしたらそれ以上）の「布石」だと思う。JASCを通して、自分に何が足りないかが痛いほどはつきりわかったおかげで、今から何をしなければいけないのか、何を学ばなければいけないのかがわかった。もちろん私が今からすべきことというのは、達成するのも、達成したかどうかの判断基準を設けるのも容易ではない。けれど、今やるか、やらないか、やれるか、やれないかで、私の20年後は全く違ったものになると思う。

21歳で、JASCを通してこれに気づけた私は、やっぱりかなり運がいいかもしれない。20年後、40年後・・・「今の私があるのはJASCのおかげ」と胸をはっていえるように、努力しなければと思う。それが、JASC中足を引っ張り続けた私を見限らず助けてくれた人への最大の恩返しだと思う。

2005年8月、21歳の夏。

ここからが、私の人生の第二幕“POST JASC”です。

篠原 舞

今年の2月、手にした第57回日米学生会議のパンフレット上に大きく掲げられていた「共に創る明日～戦後60年を今日振り返る～」というテーマを見た瞬間、この会議に参加したいと強く感じたことを覚えている。私はその時高校3年生であり、4月から東京女子大学の社会学科への進学が決まっていた。書類（自己PRや参加希望理由等）を書き始める上でも、自分の今の位置や立場、そしてそこから自分には何ができるのか、何をしたいのかを考えた。未知の領域（大学生活や一人暮らし）に入る前の漠然とした不安感や、自分の立場（大学1年）に対しても心配が拭いきれなかった。結局のところ、不安や心配も現実のものとなり、問題に直面することになったが、この夏JASCに踏み込んでいって本当に良かったと思う。

私は第57回JASC参加者の一人になった後も、自分の役割は、何を求められて選ばれたの

か、などと春合宿から本会議中にかけてずっと模索していた。大学に入り、色々なものの考え方を学び始め、それにも納得し、そうしていくうちに何が正しくて何が間違っているのかが分からなくなっていた。感情で生きてきた私に、感情を殺した理論的な思考、発言が求められ、批判的な視点を持つことも教わった。そして、私もそれに応えようとしていたし、しなければだめなのだと思っていた。この JASC では、自分を力不足な、小さい者としか思えなかった。だから、私は学ぶ側に徹しよう、色々なものを吸収しようと考えた。私の JASC はそうやって終わっていくのかな、と思っていた。しかし、ある出来事がきっかけで自分の中の考えが大きく変わることになる。むしろ、今考えてみれば、自然体でいることが好きな私が、このまま JASC を終わっていたほうがおかしかったかも、と思う。きっかけは広島サイトでのこと。

広島は私の故郷で、広島で生まれ、広島で育ってきた。ボランティアで平和活動をしている父親のもとで育ち、学校では重要課程として平和教育を受けていて、私は「平和」についてさまざまな経験を通して、その都度深く考えてきた。それが大いに影響したのかもしれない。広島では、とにかく毎日がとてもいい気分で、蒸し暑かった。街は被爆 60 年に向けて日夜さまざまな場所で会合が開かれ、平和公園には多くの平和を祈りに来た人々が訪れていた。私はその時に異常なほど広島に帰ってきたことが嬉しくて、皆にたくさん広島の良い所を紹介したかった。「広島人」という意識が強く私の中に生まれていた。

変化が起こったのは、広島会議で「はだしのゲン」の作者である中沢啓二先生の話聞いた時。私はこの漫画を読まずに、若者がヒロシマを語ることは邪道だと思うくらい、自分自身この作品がとても好きで、作者に会うことをとても楽しみにしていた。「はだしのゲン」を小学生の頃から読んでいて、この激しくも悲しい、しかし希望を忘れない漫画を描いた作者は、漫画の中のゲンのように明るく元気で、強い姿勢で平和をアピールするようなアクティブな人かなと想像していた。ところが、私の目の前に現れた先生は、謙虚で、腰が低く、物静かな人だった。このような人が、あんなにも力強く激しい漫画を描くのか。先生の話、様子、質疑応答を通して、私は広島に住んでいた多くの人々の上に原子爆弾が落とされ、あのような感情をこの人に植え付けてしまった運命に、怒りにも

似た強い感情が湧き上がってきた。生き残った先生のその後の人生を思い、なんと悲しく、忘れられないつらい思いを抱え込ませているのか思うと胸が苦しくなった。感情を押しさえ込む生活をしていたぶんの、反動が今返って来た、というように、激しい動悸を覚え、涙が出てくるのを必死にこらえていた。被爆体験者の方の辛い話を聞くのは初めてではなかったのに、どうしたのか、午前中、平和記念資料館を見学し、在日韓国人の李家想さんの熱く強い訴えも聞いたから、疲れているのかなと思っていた。

そうして出てきたこの感情は、広島サイトに続き、沖縄サイトでも大きく現れることになった。被爆者の人の話、被災者の人の話、聞いたたびにその人の感情がストレートに自分の中に入ってきて、同調するかのようによく共鳴していた。その場面の想像がとてもはっきりとイメージされ、不思議な感覚だった。抑えることができず、痛いほどの思いが突き刺さってきた。戦場で亡くなった人ももちろんのことだが、そこから生き残った人々の苦悩も思い、その人たちが、今どんな思いで私たちの前に立ち、泣いているのか、何を乗り越え、まだ何を抱え込んでいるのか。それら全てを受け止めてあげたい、と思った。そうすると、もう JASC にいる現実すらきつくなり、辛くなった。JASC 参加者たちの多くが、広島や沖縄で学ぶことには真新しいことが多く、新鮮であったのかもしれない。沖縄にも、私は4回訪れており、JASC を含め3回は平和学習で来ていた。彼らにとって原爆や沖縄の基地問題を消化し、次の段階に至るには時間が必要だと私は知っていたし、それを十何年間学んできた私とは意見も見方も違くと理解していた。私は受身の側の立場から物事を見てきて育ってきたからだ。彼らとは意見が違ふ、理想論は拒否される、それに憤りを感じるようになり、自分は子供なだけなのか、と卑屈にもなっていた。なんでアメリカを憎まず、戦争を憎み、原爆を憎むのか。60年前の熾烈な殺し合いをした国同士の若者たちが今、経った60年で、1ヶ月共に旅行することを喜び、毎日をとっても楽しそうに過ごし、互いに学び合い、討論している。JASC というその空間に違和感を覚え、どうして、アメリカにもっと敵意を感じても許されるのに、と思ったのだ。でも、それをヒロシマの人々、沖縄の人々は、望まない。許し受け入れている。国を憎み、その国民たちを恨んでいては何も解決しはしないと分かっているからなのだと思う。日本人であるという自覚と、自分という一

人の人間との葛藤だった。気づけば参加者たちと深い話をすることを避け、毎日の予定を黙々と過ごす日々を送っていた。今思えばとてももったいなかったと思う。どんなときでも、自分を否定しない仲間たちなのだと分かっていたら、夜更けまで色んな話をしていたかもしれないし、もう少し有意義な時間を送れていたと思う。自分の思いも理解してもらえたかもしれない。でも、一歩外側から JASC を眺める位置に居ることが（ラッキーなことに私は記録係で常にビデオを撮っていたので、不自然ではなかった）、その時にできた自分の精一杯 JASC をうまく過ごす対処だったから。私の中でも、この感情に收拾がつかず、どう片付けていいか困っていた。皆としゃべって、感情的になるのも怖かったから。そして何より、人は右翼とか左翼とかで簡単に思想を区切ってしまうけれど、私には譲れない大事な平和に対する思いがあったからこそ、それを否定されなくなかったからだ。

しかし、こんな思いを救ってくれたのもまた JASC だった。沖縄サイトの日程も後半にさしかかったバスの中、私は二人の女の人に助けられた。ひとりとは私と一緒に涙を流し、それでいいんだよ、と言ってくれた。ひとは私の状況を見て、それから逃げちゃいけないよ、その先に探したたものがあるんだからね、と教えてくれた。自分の考えを曲げなくてもいい、そういう考えを持つ人は必要だと。嬉しかった。

これがきっかけで、私は自分の考えをきちんと出せるようになった。「安全保障と平和構築」の分科会でも、私は戦争を生き延びた人々の思いに耳を傾けてきたからこそ、その人たちを無視し感情を捨てることをしない。現実の状況も理解しているが、日本の戦争放棄条項はこのままずっと維持するべきだ、と言えた。皆の笑顔も素直に受け入れ、私も楽しめるようになった。

JASC では本当に色んなことがあったし、起こった。とっても楽しかったし、悲しかった。こんなに1ヶ月前の自分と変わったのかと思うと嬉しくなる。終わってみれば 80 人の仲間と出会い、著名人の人たちともお話をする機会を得て、自分の人生にまた重みがでたと感じる。1ヶ月で 100 人近くの人たちと出会えたこと、これが何よりも自分も大きくしてくれたと思う。JASC が終わってまだ 1 ヶ月、これから先 JASC に参加して良かったと思う事が増えていくと思うとわくわくする。思わぬ出会いもしていくはず。

第 57 回実行委員には全てにおいて感謝して

いる。また、日米学生会議を支えて下さっている多くの方々にもお礼を言いたい。

ありがとうございました。

島村 明子

この一ヶ月間は何だったのか？会議が終わった今、自問自答してみるけど一ヶ月前よりも答えられない質問が増えていることに気づく。

日本人とは？

私は「日本人」なのに日本を知らない。「帰国子女」だけれども、日本には「帰って」いない。8月15日も平和のイシに刻まれた名前の重さも知らない。なぜ私が戦後を見つめなければいけないのか。なぜ私は広島と沖縄と向き合わなければいけないのか。なぜ、なぜ、なぜ？私にはわからなかった。だから答えを欲して探した。ある意味答えを欲することを強制されたけれども私にはわからなかった。

答えなんてあるのか？

広島の小学校の、被爆の跡が残る木を見ながら、普天間の海を見ながら、答えを模索していた。

青空の下原爆ドームを前にして、アメリカ人夫婦が “We American apologize” という布を掲げているのを見て安堵した。ワタシにはやっぱり日本へのナショナルスティックな感情が中で渦巻いていることを再認識して、何も言えなくなった。中国人学生と靖国に関して話してその印象は強まるばかり。けど私は帰国するまで 8 月 15 日や靖国や原爆の意味を知らなかったし、原爆が正当化できないものなのか、政治的には正当化されうるものなのか？皆それぞれの意見を持っていて、自分の意見がわからなくなった。不安定で不確定な存在としての自分が浮かび上がった

平和記念資料館を回って、展示が目に焼きついた。広島会議で中沢啓治氏の話聞いて 結局。その「場」は中沢さんが自身の被爆体験を話すことで成立しているのだ と気づいて 結局。

通訳を介してもその発話は
伝えきれないような気がした。

焼き爛れた皮膚に、噴出す赤
突き刺さる砕けたガラスに、

音にならない悲鳴

沖縄の壕で感じた暗闇に滴り落ちる水
湧き出す蛆に 理由もなく自分はぞっとした。

漢字で表象される「広島」を超えた「ヒロシマ」の意義を、垣間見た気がした。理論を越えた想いや意見というのに、少しだけ触れられた？

体験談を聞くことで 写真を見ることで 耳と目とキオクに焼き付くものがある。これが戦争を知るってことなのか。そもそも「知る」とはどういうことなのか。そもそも…過去を我々が認識することができるのか。私たちは、何をすべきで、何ができるのか。なぜ会議に参加するのか？北海道と米国と豪州で育った

私は、私は誰？

「明日」はどうやって

共に創っていくの？

たくさんの問いかけの中で、今まで自分が持っていた社会通念や考えを、突き崩して、視野を広めることができた気がした一ヶ月だった。

杉田 道子

「本会議が終わったら、それまでの努力が実った達成感と満足感で、うれし泣きでもしちゃうんじゃないかしら。」こんな私のしたたかな期待を裏切り、会議後の私を襲ったのは虚無感と疲れ、そしてぼーっとしてしまうといった変な感覚であった。そして、会議後、一ヶ月経った今になってやっと、期待はずれのこの感覚こそが「燃え尽きた」証拠であったことを確信した。一年間わき目も振らずに全速力で走り抜けてきた日米学生会議の実行委員生活に、ようやく納得のいく終止符が打てそうである。

日米学生会議での体験はあまりにも衝撃的で、現段階で一般化して活字にすることに多少抵抗を感じる。ひとつひとつの出会いや仲間と共に乗り越えた経験は、今でも反芻するごとに新たな示唆を与えてくれるものである。特に実行委員としての一年間は、会議の企画や運営のために議論を重ね、今までで経験したことがないほど自分の人間性や価値観を仲間とむき出しにし合ったことが、私の中で強烈な経験の塊のように残っていて、これを解凍しながら学んでいく作業には、まだまだ時間をかけていきたいからである。

しかし、何よりも最大の収穫は、自らの弱さに直面し、それを必死で乗り越えるために行動したという達成感とそれからくる自信であろう。日米学生会議で嫌というほど痛感した mission の弱さ、学生の未熟さ、結果の見えにく

さ。この一年間、問題意識を次々と実行に移していかなくてはならないというプレッシャーのもとで、このように自身を知れば知るほど、行動することが怖くなるが多々あった。学生という立場は、何事にもある程度足を突っ込んでも逃げられるという特権がある上、学業では批判的な考察を求められるが、「ではそのために自分には何が出来るか」、というレベルまでは問われることは滅多に無い。しかし、日米学生会議に参加して、また運営する立場になって、それでは満足がいかなかった。そして、「被爆地ヒロシマのメッセージが世界に届かない」という問題に対して、「昔の話だ」と目をつぶったり、中国での反日デモをニュースで見て、「日中の溝はこういう理由で深まっている」ともっともらしい分析をするにとどまるのではなく、「では日米学生会議としてはどのように問題に取り組むか」というレベルまで考えだそうと暗中模索した。しかし、そのようなプレッシャーを受けていながらも、講演会の企画、財務・広報・選考の計画、本会議のアイディアは浮かんでは消え、浮かんでは消え、最終的なアイディアは優れたものばかりではなかった。だが、「こんなことしか出来ないのか」という失望感をどこかで抱えながらも、「何かやってやりたい、とにかくやってみなければ」という強い意志のもとで、とにかく前進することだけを考えた。

このような葛藤の結果、いくらか手ごたえを感じつつも、会議のすべてが成功であったとは言いがたい。それでも実行に移してよかったと感じたのは、作ったフレームの中で参加者が起こしてくれた想定外の化学反応が起こった瞬間と、参加者、そして実行委員の皮がたまねぎのように一皮も二皮も剥けていく過程を目の当たりにしたときだ。広島サイトで原爆と向き合っている米側参加者との会話、自由討議において私が考えもつかなかった問題意識をシェアしてくれた参加者、はっとさせられるような人間性を持ちあわせた参加者達の活躍や思いやり、中国からの参加者がもたらしてくれた思わぬ発見など、ここには書ききれないほどの化学反応が起こった。そして、価値観をすり合わせる毎日を通じて、参加者の一人ひとりが相互理解、そして自己発見をしていく様子をみることは、私にとって他の何事にもかえがたい報酬であった。そして期待通りにいかなかった企画の数々も、その種をもとに参加者の力で予定外の色の花が咲いたことによって、何ら

かの意味を持つものだったということを実感した。

これらの日米学生会議を通じて、感じたことは山ほどある。しかし中でも、今後一生の糧になっていくであろうという実感が一つある。それは、

“Light the candle before you complain the darkness”

という以前から好きだった言葉に集約される。文句を言うのは誰にでもできることであるし、批判をするのは簡単だ。実社会を見ても、どれほどこれが多いことだろうか。今後、灯したくても灯せない蠟燭はあるかもしれないが、灯そうとする努力が恐ろしいほど楽しいことであることを実感できた幸せを、必ずや忘れないでおきたい。

そして、最後になりましたが、このような行動することの幸福感を与えてくださいましたIECの皆様、後援団体/賛助団体の皆様、その他多くのご協力くださった方々、そして、一年間を共にした実行委員と、熱い熱い夏を創り上げた仲間である参加者に、心から感謝したいと思う。せっかくのご縁ですから…これからも共に明日を創り上げていくことが出来ますように。

張 文涵

私にとってJASCは何なのか、JASCにとって私は何なのか…。本会議期間中は、前者ではなく後者についていつも考えていました。自分はJASC参加者の中でどんな役割を果たし、どう貢献できるのか。考えるたびに自信がなくなっていきました。あまり貢献できていなかった自分を見て、他の人から過小評価されたくない焦り、逆に、今まで自分は自分を過大評価していたのかと悩む、ずっとその繰り返しだった気がします。まさしく、“自分を見失っていた”のでしょうか。それとも、“自分を見失った”のに気付かされたというべきでしょうか。または、本腰を入れて探し始めたのかもしれません。いずれにしろ、JASCは私の今までの大学生活を象徴するようなものであり、自分を見つめ直す絶好の機会でもあり、自分の今の状況を正確に示してくれました。この一ヶ月間で特に気付いたことをいくつか書きたいと思います。

まず誰もが最初に思い浮かべるであろう、厚

くて高い、英語という名の壁ですが、私の場合、それにより更に厚い殻が自分の心にできてしまったのが、最初の挫折と言えるのかもしれませんが。他の日本側参加者のように、初めから持てる力を総動員してぶつかっていけばよかったのですが、その正面衝突で砕けてしまうが怖くて、迂回ばかりしていました。傷つかないように避けて通ることを覚えたほど器用に、そして大人になっているのが、今思えば少し寂しいです。自分ができるとはしないなんて、いかにも「よくない大人像」のようで。しかし、この殻は、最後にはなんとかヒビが入ることとなりました。それはもちろん、みんなの友情のおかげですが、何より、「勇氣」を思い出させてくれたことにあります。“勇氣”がなければ、何もできない、友達さえも。「勇氣」を出せば、たとえ失敗したとしても気持ちがいい。大切なのは自分が後悔しない・納得することなのです。あの時、勇氣を出して本当によかった、と今でも思える場面がいくつかあります。

もう一つは、私が第57回JASCに是非とも参加したいと思った重要な要因の一つでもある、広島・沖縄サイトでの出来事です。連日、平和記念式典や原爆ドーム・ひめゆりの塔など、平和について企画に追われ、だんだんに自分の感情が鈍っていくのに気付いていました。確かに、戦争の悲惨さや平和を享受していることの有り難さは痛いほど伝わってきましたが、それだけで終わってしまうという、一種の物足りなさを感じました。私にとって、戦争は、過去であり遠い国のことであり、非現実または物語に過ぎないのです。しかし、多くのアメリカ側参加者は全く違っていました。原爆資料館でも原爆ドームでも沖縄の平和記念館でも、そしてそこに住む人々との何気ない接触にも、心からの涙を惜しみなく流していたのです。そして、何人かの日本側参加者も戦争への素直な感情や、それが風化している今の社会に対する憤りを、涙や議論という形で示していました。それなのに、自分はいっこうに強い印象・感情を持ってない、なぜなのだろうという焦りを感じたこともありました。自分が当事者ではないから、つまり日本人でもアメリカ人でもない、沖縄や広島には直接的に感情移入できないでいたのかもしれません。更に言えば、自分は幼い頃からずっと「外国人」であるという重いものを背負ってきて、愛国心や国籍に対するアイデンティティが欠落し、戦争を主観的にとらえられ

ないでいるのでしょう。これが良いか悪いのかは定かではないし、判断する必要もあまりないのですが、ただ一つ言えるのは、私が無意識に強い欠乏感を持っているということです。しかし、JASC ではまた、こういう人にたくさん会うこともできました。アメリカ人とは言え、本当に民族や背景が様々だったり、自分と似た境遇の日本側参加者もいたり。そうした人々と話してみると、自分が、いかに「国籍」にこだわらないかと同時に、いかに「国籍」を強く意識しているかに気がつきました。多くの方はアイデンティティの一部を国籍に委ねていますが、私のような人は、このような大きな流れの中で、いかにして自分らしさを保てばいいのでしょうか—ある人のように母国の誇りを忘れないでいるか、他の人のように今住む国に完全に適応しようとするか、それとも国際人としてアウトサイダーに徹するか—いずれにしろ、この経験を通して感じたのは、自分はどこへ行っても自分は自分でありたいということです。誰のまねをするのでもなく、何かに流されるのでもなく。

このように、JASC での1ヶ月は、私の日本観・アメリカ観・世界観・人生観を変えつつも、根底にある自分の一貫した何かを見つけるヒントをくれたという、二つの相反する効果をもたらしました。しかし、こうした効果より何より、一番ためになりかつ嬉しかったのは、一度に80人もの大好きな友達ができただけです。本当に、彼らから受けた刺激は計り知れません。使い古された表現ですが、彼らがいたからこんなにも楽しめたのだと思います。効果や感情は一時のものかもしれませんが、この出会いは是非とも一生ものにしていきたいです。



津端 幸江

4月のある日、下宿に一通の速達が舞い込んだ。「日米学生会議に合格しました」とあった。私はJASCの選抜試験にてっきり落ちたと思いついていました。なぜなら、英語のディスカッションもうまくできなかったし試験官に自分の考えをうまく言えませんでした。ただ、「とりあえず言いたいことは言えたし、落ちたらしようがないな〜」とっていました。

そもそも、私はJASC参加者には珍しく、アメリカがあまり好きではありませんでした。特に国際社会におけるアメリカの振る舞いに嫌悪感を持っていました。ただ、現実として日本はアメリカに頼っているので、ジレンマを感じていました。そんな中であるとき、ふと「アメリカって実際はどんな国なんやろ?」と思いました。私は、アメリカのことをTVや新聞で見聞きしただけで、偏見で語っていたのでした。私は、反省し、アメリカをもっと知りたいなと思い、アメリカ人と交流できる場をさがしていました。そしてJASCにたどり着きました。

JASCが始まってみると、私はなぜここにいるのだろうかと思ひました。皆のレベルが高く劣等感にさいなまれました。それは結構しんどかったのですが、ただ、それも始めのうちだけで、時間が経つてくると、自分の役割もしっかり理解し、周りとの溶け込むことができました。そして、次第にアメリカに対して親近感を持つようになりました。

今回の1ヶ月で様々なことを学びましたが、特に印象深いのは、滋賀、広島、沖縄サイトにおいてでした。滋賀サイトでは、今まであまり考えることのなかった「環境」について深く考えることができ、非常に興味を持つようになりました。JASCが始まる前には、自分で考えるところのエコ生活をひそかに実践したりしました。例えば、ごみの分別から始まり、電気節電のための早寝早起き、原付を自転車に乗り換えてみたり・・・結構辛かったです。広島サイトでは、原爆を中心とした平和について学びました。実は去年の夏にも、個人的に、戦争を考えるために広島や長崎に行ったのですが、この時とはまた違った視点から戦争を考えることができました。例えば、日本は戦争の被害者であると同時に、加害者であることを強く感じま

した。沖縄サイトでは、米軍基地問題や未だに残る戦争の爪痕を実感しました。また、東京サイトでは中国の参加者と戦争のことなどについて話し合うことで、違いを認識し、今後我々が取るべき道を真剣に考えるようになりました。全体を通して戦争がメインテーマのようなどころがありました。それぞれのサイトで皆と、意見交換する友がいて、ありがたかったです。また、今回の会議でOB・OGとの強い結束とあたたかいまなざしに、感謝せずにはいられませんでした。

この会議はたくさんのお力添えをいただいたからこそできたのであって、我々学生だけで成し遂げたのではないと思います。このことを忘れないで、どうすれば、このJASCでの経験を役立てることができるのかをもう一度、考えて行きたいと思います。本当にありがとうございました。

出浦 寛子

7月27日、午後7時。大阪の伊丹空港の中の小さなレストランで、私はリンダと、グラタンを食べていた。あまり食欲がない。食事中、何度も到着ロビーに目をやる。もう二十分もすれば、大きなアメリカ人たちがこの小さな空港に到着するのだ。一体どんな人達なのだろう。皆バスにちゃんと乗れるだろうか。立命館大学に無事行けるだろうか。そして二十分後、その時が来た。巨大なスーツケースやリュックサックをひとり二、三個持ったアメリカ人40人近くが、ぞろぞろと到着ロビーに集まる。長いフライトのせいか、皆疲れている。7人のアメリカ側実行委員達と一年ぶりのハグをするが、テンションは決して高くない。始まったのだ。疲れていようが何だろうが、第57回日米学生会議は遂に動き出したのだ...

第57回日米学生会議は、京都、広島、沖縄、東京の4サイトで行われた。実行委員は一年前から、会議自体の内容を練る以外に、広報活動、財務活動、予算作成、参加者選考なども行い、会議の企画・運営を全面的に行う。毎週のように四ツ谷の事務所でミーティングを行い、平日でも放課後に事務所に通って発送作業をしたり、過去の会議のリサーチなどをした。そしてそのルーティーンは本会議直前まで続いた。だから、第57回日米学生会議は、一ヶ月間の会議というよりは、実行委員としての一年間の活

動成果の集大成という意味合いの方が強かった。本会議中は、全てがスケジュール通りに進むか気にしながら、時には動揺したり、空回りして迷惑をかけたが、一年間を通して練ってきた実行委員のプランは着実に実行に移されていった。実行委員同士お互いを助け合い、参加者にも支えられ、なんとか会議は予定通り進んだ。

しかし、予定通り進んだ、とは何とも楽観的な表現だ。表面上はなんとかスケジュール通りに進行しても、心の中は常に複雑な思いでいっぱいだった。参加者が漏らす不満や要望に応えられないことに自分の無力さを感じたり、実行委員と参加者の関係がわからなくなって混乱した。アメリカ側実行委員とのコミュニケーションでも想像以上に苦戦し、サイトの詰めも露呈した。「一年間の活動成果の集大成」なんて格好良いことを言ったが、本当にそんなスゴイことを自分はやったのかが疑問に思えてきた。実行委員という肩書きに満足して怠っていた部分もあったし、他の実行委員やデリストアッフに甘えていたのも否めない。つまり、私はもっと頑張れた。しかし気付いたときにはもう遅かった。第57回日米学生会議は、まるで得体の知れないモンスターのように、進み続けたのだ。大きな音を立てて、大勢の人を巻き込み、時には色を変え、時には暴走し、たまに狂い、泣き、笑い、そして爆発し、時には停止し、でも着実に変化しながら、dynamicに、staticに、unstoppableに、aliveに。

... 8月23日、正午。東京の国立青少年オリンピックセンターのバス駐車場には、80人近くのJASCerがいた。大きなスーツケースやリュックサックは一つ一つバスに積み込まれるが、アメリカ人はなかなかバスに乗ろうとしない。最後の写真を笑顔で一緒に撮ったり、強くハグし合ったり。別れるのが惜しくて、終わるのが切ない。涙も止まらない。悔し涙か、感動の涙か、はたまたただのもらい泣きか。多分、全部だし、もはやどうでもいい。私は第57回日米学生会議を通して、自分と真剣に向き合い、成長するチャンスを与えられた。それに気付いただけでも幸いなのである。

最後になったが、第57回日米学生会議にご支援、ご協力いただいた皆様に、心から感謝し、御礼申し上げます。

中里 広明

いろいろあった。良いことも悪いことも。ただ、自分にとって大事なことは、この一ヶ月間で、ふとした瞬間に、ふらりと心が動いたことが何度もあったこと。それらをまとめて何か言おうとは思わないけれど、そのかわりにそうして心が動いた、印象に残っている場面をひとつだけ、書いておこう。

東京。午前中に中国からの参加者を加えてディスカッションをし、昼食をとっていたときのこと。アンナが座っていた斜め横に僕が座り、そのあとすぐにデレクが僕の向かい、アンナの隣に座った。すぐに、デレクは午前中のディスカッションの批判を始めた。デレクが言っていたのは、議題が大きすぎたこと、会話に脈絡が無く、建設的でなかったこと。ふむふむ、と同意しながら聞いていると、デレクは、そもそも学生のディスカッションには限界があるんじゃないの、というような話を始めた。それはちょっと、と何か言おうとしたら、それまで黙っていたアンナが、一言、Why are you here? と言って、またがつつがつご飯を食べつづけた。この瞬間のアンナはすごくカッコ良かった。

中島 朋子

「トモコの将来が楽しみだ。」

これは日米学生会議が終わる最終日から今に至るまで参加者の多くの人から得た言葉だ。私の中で今までこれ以上の激励の言葉はないと思っている。

“I'll be looking forward to your future Tomoko!”

この言葉の中には私が日米学生会議と言う夢のような、けれど夢には決して出来ないほど手ごたえがあり、生涯にわたって忘れる事ができないであろう一ヶ月の体験が詰まっている。

JASC が始まった初日、私は他の参加者の前で自分の目標を述べた。

「私は全てを勝ち負けで判断してしまう傾向があるからこの一ヶ月は純粋に感じて純粋に感動したい。」この目標に挑戦するように、日米学生会議での日々は本当に充実感でいっぱいだった。様々なバックグラウンドを持ち、人間性の濃い、熱い人たちに会い、普通に暮らしていたのでは経験できないような場所を訪問する機会を多く得られた。それまで真剣に考え

る機会の無かった問題や日本とアメリカの文化的な違いについて夜遅くまで語り合ったり、独り言が英語になるほどに英語をしゃべる事が自然になったりと、本当にたくさんの経験を通して今までにない自分の視野を広げる事ができた。JASC 参加前の私は何か自分に無い優れた人たちに会ったりすると、「ああ、負けた！」と誤ってしまい、人から何かを学び取るという姿勢がうまく出来なかった。しかし JASC が終了するころには「この人たち、本当にすごい！！」と心のそこから他の参加者に対して思うことが出来るようになり、目標に近づく事ができるようになったのが私の中でのこの会議の大きな成果だ。

大学二年の夏にこの日米学生会議に参加した私は参加者の中でも年少のほうである。人生の経験も、もちろん学術的なバックグラウンドも他の多くの参加者に至らない私は「こんなにすごい日米学生会議に参加するのは少し早すぎたかな。」と会議が終盤になるにつれてその思いを強くしていった。年齢の差など決して関係ない JASC であるが、せつかくこんな経験をするのならばもっと知識や人生経験を少しでも多く積んでから参加したかったという思いもあった。しかし一ヶ月経った今、私は 10 代最後の夏をあの特別の空間で過ごすことができたことを心から幸福に思う。私には 19 歳の夏だったからこそ経験できた事、感じ取れた事がきっとあったはずなのであり、それを十分に感じる事ができたのだ。それは必ずしも楽しい事ばかりではなく、自分の人生観や価値観を大きく揺るがし、時には苦悩するものであったが、私の視野を大きく広げてくれた。本会議中にお会いした数多くの元 JASCer が「JASC のすごさは終わった後に気付くものだ。」とおっしゃっていたのだが、確かに JASC が終わってから今日に至るまで私の視野はまるで際限がないような広がりを見せ、大きく私を成長させていると感じている。それも以前には無い純粋な感動とともに。

一生手放したくない本当に素敵な仲間たちに出会えて、その人たちからもらった、

「トモコの将来が楽しみだ。」

と言う言葉を私はこの先もずっと心にとどめていき、そして自分を更に飛躍させるエールになるだろうと思っている。みんな！本当ありがとう！！最高の夏だったわ。

生板 沙織

眼を瞑って思い出すのは橋の上から見渡せる原爆ドーム。静寂な灯籠流しの風景。暑い街中の路面電車。TBSが放送した「涙そうそうプロジェクト」を見てからは、60年前の原爆投下までの一週間を被害にあった同じ場所で過ごしたことを初めて実感した。今こそ日本列島で戦争は無いが、テロや地震などいつ何が起こるか分からないこの危険な世の中は、60年前と何も変わっていないのかもしれない。父親の仕事で今まで何度も引越しを繰り返し、その都度大切な人々を残してきた私にとって、次に彼らに会う前に自分や彼らが死んでしまったらという恐怖が常にある。だから広島を思い出すと胸が詰まるのかもしれない。非常に自分勝手な理由で感情移入しているが、今の私にとってそれが精一杯である。本会議中、広島や沖縄の平和記念資料館を巡っているときは、素直に感情すら表現できなかった。原爆や戦争と向き合うのが怖かったのだろうか。平和記念資料館に入るや否や、悲しみをそそるような音楽や照明の効果にまぎらうざりし、展示物をあまりよく見ることも無く、外に出るほか無かった。しかし本会議が終わり、毎日のように原爆投下のことを考えるようになったが、ただただ心が痛む。高校を卒業してから帰国した私にとって、この会議の最大の目的は「日本を知る」ということだった。広島や沖縄を目の当たりにし、米国を嫌いになることも日本を好きになることもなかったが、今まで日本を全面的に否定していた私の何かが変わった。日本は自分の肌に合わないという気持ちに変わりはないが、「日本は悪い国だから」という気持ちから、「日本は良い国だろうけど、自分にはやはり合わない」という気持ちへと変わっていったのである。そしてこの旅を終え、初めて日本にも何か貢献しなければという気持ちが芽生えた。言葉では語りつくせないほどまでに滅ぼされたにも関わらず、前向きに米国と手を取り合う、尊敬する日本に。今回の米国側の実行委員長が中国新聞にインタビューを受けたときの言葉が印象深く心に残っている。これからどうやって平和に貢献したいかという質問に対し、彼女は「周りの家族や友人、恋人、知人にとにかく広島に行くように、原爆投下の理由を他の角度からも見てみるようにと彼らの背中を押す」と応えた。小さいアクションかもしれないが、私も是非それを実践していきたい。日米学生会議とは、今まで受

けてきた学校教育よりもインパクトの大きい人間教育を施す場所なのだろう。日本と米国の間でただ板ばさみされるのではなく、両方に身を投げようと自分に誓った夏であった。

錦 信吾

日米学生会議が終わって約半月・・・未だ、私はこの夏の経験を消化しきれないでいる。その理由の一つは、一度にあまりに多くの出来事が起こり、頭がパンクしてしまったためである。ただ実際のところ、会議中のディスカッションやフォーラムが英語だったので、純粋に内容が把握しきれないというのが現状であろう。

何はともあれ、日米学生会議が終了し、今はおもしろい友達に出会えて本当によかったと思っている。会議中の当面の目標であった『とにかく目立つこと』も達成できたのでよかった。広島・沖縄 site を通し、戦時中・戦後の日本に関し新たな発見、再認識ができたのでよかった。最もよかったことは、アメリカ側参加者とのディスカッションや異分化交流の中で、価値観を共有できたことである。育ってきた文化的背景が違うため、当初は戸惑い緊張したが、時間が経つにつれ気心が知れてくると、共に酒を酌み交わし、時には議論し、大いに盛り上がった。また、飲みすぎたアメリカ側参加者を介抱するという一幕もあった。『アメリカ人も日本人も通ずるところがあるのだ』と当たり前のことを、寝食をともにすることで身をもって実感できたことが、プチアメリカ・英語コンプレックスを抱えていた自分にとって、身近な一番の成果だったように思う。

と、ここまではよかった、よかった尽くしである。しかし、同時に私個人における問題も山積みであった。特に、専門性の違いによる知識の不足が大きな問題であった。私は医学を専攻しており、経済やグローバル化に関しては疎い面がある。そのため、会議の内容が理解できない時が往々にしてあった。さらに日米学生会議のメインテーマの一つである、output を考えると更なる知識の充実が必要となってくる。やはり、今後海外での仕事を考えるにあたり、一つの専門性と幅広い知識が重要になってくることを痛感した。今回の自分のダメダメさの実感が、今後の将来に生かされることを願う。生かしていかないと、どうにもならないので、がんばりどころである。

これらのことを押し並べて考えてみても、会議への参加は大成功であった。反省点が多く見つかる会議であったからこそ、次につながる課題も見えてきた。今は、『日米学生会議で何を学びましたか?』という質問に対する回答を模索している段階である・・・最後になるが、日米学生会議実行委員・参加者・バックアップしていただいた皆様に感謝を述べたい。本当にありがとうございました。



沼田 雄二郎

日米学生会議に参加する以前に抱いていたイメージと参加後の感想、以上の2点について記したいと思う。

①参加前

当初、日米学生会議という単語から連想していたのは、まさにフルブライト奨学金制度であった。つまり、親米派の生産工場のようなものである。このフルブライト奨学金制度によって現在に至るまでに約 6000 人の優秀な人材が渡米し、現地の教育を受けてくるのであるが、その強力な人脈をアメリカが有利な外交の展開のために利用していることは言うまでもない。これは日本に対してのみおこなっているのではなく、アメリカは世界中から優秀な人材を集め、教育している。このようなソフトパワーと圧倒的なハードパワー（軍事力）を組み合わせ、覇権国家としての地位を揺るぎないものとしているのだ。

話を戻すが、初めはそのように考え、身構えていた部分があった。

②参加後

しかしながら、実際の学生会議の内容は予想に反したものであった。期間中に親米的な教育は無く、その代わりに、これでもかと思えるほど第二次大戦の悲惨さについてひたすら学ぶこととなった。この点については、今回が日本開催だったこと、及び戦後 60 周年記念だったことが少なからず影響していただろう。

このように内容的には想定外であり、予想以上に日本側のオリジナリティ溢れるものであったのだが、過去に焦点を当てすぎている点はやや気になった。過去を学ぶというのは、理想的な未来を築くためにするものであって、今後の展開に対して新たな答えを導き出さなくては意味が無い。だが、会議中にそれらが達成されたとは思えなかった。

冷戦の終結後、東側諸国の崩壊や BRICS の台頭などによって、日本の地位は著しく低下してしまった。半 chaos 状態の国際関係の中で、力なきものは何も変えられないことを歴史が教えてくれる。では日米関係を軸として、どうしたらこのような事態（日本の地位低下）を解決できるか、過去をもとにその手段・戦略を模索していくことが、我々若い学生には必要とされているし、テーマとしても説得力があるのではないか。また、もちろんこのことは学生会議と関係なく考えるべき事柄なのだが、次回の学生会議にも大きく反映されるよう努めたいと思う。

袴田 隆嗣

本感想文では私の第 57 回日米学生会議を通しての具体的な経験を素材に、本会議に参加することで得たものを記して全ての協力者の方々へ感謝を表したいと思います。なお、実行委員という特殊な立場で参加したため、実行委員活動を取りわけとりあげたいと思います。

私はつまらない人間です。何がつまらないかというと、常に当該行為の目的を個人レベルで設定し、目的合理的な行動をとるからです。これまで私は意識的にか無意識的にかを問わずそうしてきましたが、そうした態度を問題とは思わずに生きてきました。

私は財務及び沖縄サイトの企画及び運営に携わらせていただきました。実行委員活動のほ

とんどすべての意思決定において、私は上記の原則に従って行動していました。実行委員全体としてのコンセンサスが得るまで話し合うことのリターンが不明確なときは、組織としての目的でさえ話し合わないという提案をしてきたのです。

沖縄サイトのコーディネーターとして活動していたときのことで。ホームステイの実施を予定していたのですが思うように受け入れ先が見つかりませんでした。会議も始まり参加者全員が沖縄に到着しても状況は同じでした。ホームステイが実現しなかった場合の宿泊先も確保済みでしたしこれ以上ホスト探しにコストをかけることに意味があるのだろうかと思直していました。しかし、協力者の方々ともう一度なぜ沖縄にきたのかということ話し合い、ホームステイをすることの意味・目的を確認し、なお実現にむけて行動することを決めました。そのときの私を動かしていたのは単なる個人のコストとベネフィットの計算のようなものではなく、情熱とか使命とか客観的には説明できないものだったと思います。結局、多くの方々の労力を頂きながら前日によく想定した人数分の家庭を確保することができました。

会議を終えて、ホームステイ実施に関して誇りに思っている半面、会議全体を通して私は大きな空虚感を抱いています。何なのかよくわかりませんが、少なくとも個人でパフォーマンスをあげられることと、組織としてでなければできないこととの間には大きな溝があるのだということは確信しております。

日米学生会議は学生に失敗する機会を与える非常に貴重なシステムであると考えます。

私はこの経験から得られたアセットを今後の人生において最大限の努力とともに運用していきます。

波多野 綾子

広島。アメデリと一緒に、流れてゆく灯籠を見つめていた。ひとつの灯籠はやがて他の灯籠の列に誘われて合流し、その彩りは、まるで闇夜の万華鏡のように、色鮮やかにゆれて。飽き

もせずに、私たちはじっと無言で川面を眺めていた。

もうそんな時間も、今思い出すとなんだか現実ではないようで、でも確かに一ヶ月前、自分がそこにいたのだとおもうと、不思議な気持ちになる。

JASCとはなんだったか。それを通して何かを獲得したか、成し遂げたか、とあらためて聞かれても、うまく説明することができない。

一ヶ月で成長したとか、何かを成し遂げたというよりも、「何か」に触れて、感じた。そういう抽象的な言葉でしかいいあわせられないようなもの。しかしそれは確実に、今この瞬間にだけ得られる、とても大切なものであるように感じた。そう、今回訪れた、土地、人々、文化、歴史、そして JASCer たち。会議中のあらゆる風景、言葉、感情は自分の中に降り積もり、自分の一部となって残った。それは自分の貧困なボキャブラリで説明しようとしても、言葉と実感の乖離に無力感を感じるのみであるが、あえていえば。

それは、「今」を生きることだった。

一ヶ月間、肩書きも、成績も、利益も、過去も将来も関係なく、今ある「波多野綾子」という個人として、参加者全員に向きあい、そして「今」を楽しむこと。毎日、参加者一人ひとりの個性におどろかされ、すばらしいメンバーに会えたのが嬉しいと同時に、自分の中の劣等感に苦しめられることもあった。そのたびに自分自身を振りかえり、再構築し。それは将来に向けての「価値」なんて陳腐な言葉では片付けられない、そのときの経験、感情そのものが宝物である。人生は結果だけでなく、過程なのであるから。

それは、きづなだった。

自分と日本とのきづな。そして自分と他者とのきづな。一ヶ月を過ぎて、ふっと偶然であって、すばらしい笑顔で再会を喜んでくれた JASCer に、自分は心から感謝した。きっと1年たっても、10年立っても、変わらぬ笑顔で、語りあうことができるだろう。信頼できる仲間がいること、かえるべき場所があること。そんな思いが支えてくれるから、何か新しいことにチャレンジしたいという意欲と活力が沸いてくるんだろう。

そして今思い出すと、灯籠流しって、「JASC」みたいだ。それぞれの祈りが、思いが、限られた時間をよりそって、より一層、光輝く。その後色とりどりの光たちは大洋に船出し、それぞれの道をまたいくのだろう。でもあの川を流れながら、共にすごした時間は、交わした思いは、きっといつまでも残る。

最後に、数々の試行錯誤をへて 57 回をつくり上げてくれた実行委員、個性とバイタリティあふれる参加者の皆、関係者の方々、親身になってアドバイスをくださったOB、OGのかたがた、会議を支え、共に創り上げてくださったすべての方に感謝を記したいと思います。また、この報告書を読むかもしれない、日米学生会議への参加を考えている方々へ。感じるもの、得られるものは人それぞれ異なると思いますが、日米学生会議が自分について、他者について、世界について考えるすばらしい機会のひとつであることは確信をもっていえます。今しかできない「チャンス」をつかんでみてください。

樋口 宏

日米学生会議最終選考面接の時に私が発した一言。

「私はロウソクのような人です。」

この言葉は実行委員の間でかなり物議を醸したらしい。ちなみに、笑いをとったつもりはない。誰も褒めてくれなくても、ひたすらに身を磨り減らして周りを明るくしてくれるロウソクのような奉仕の精神、これは私が小学校から立教で学び、キリスト教に触れる中で培ってきたものであり、自分の宝物である。夏場は熱すぎて大量にロウが垂れることもあるが。本報告書では、ロウソクの話を中心に日米学生会議を振り返ってみたい。

2005年1月に大学の教授から広報のメールを頂き、学生生活最後の夏休みを世界で一番熱いものにするために日米学生会議に参加しようと思立った。自分の足りない何か、切磋琢磨できる環境が絶対そこにはあると確信した。選考試験はどんな企業への就職選考よりも緊張したし、合格通知を受け取った時は、恥ずか

しながらこみ上げる涙を抑えることができなかった。それほどまでに嬉しかった。立教大学から唯一の学生として、日本人として、国際人として、そして何よりもこの国際的な大舞台で自分の「生き様」がどれだけ通用するものなのか。さらに自分の専攻分野である地域主義の分科会で、いかに貢献・活躍できるのかは大きな挑戦であった。期待と不安の武者震いを隠せないまま、気合十分で事前準備・本会議に挑んだ。

本会議中はひたすらに体を張った。どんなときもパワフルに、周囲が少しでも元気付けられるように自分なりに常に愛を持って努力したつもりである。言葉が通じないときは全力で体を使ってコミュニケーションをとることに努めた。Skitでは相撲をとり、Talent Showでは空手の型を演武し、ピアノで自作曲を弾き語った。「ノコミュニケーション」の席では大声で駆け回り、カラオケや海などの遊びにも率先して関わっていった（無理やり笑いにこじつけてすべったことは数知れず・・・）。運営、誘導などの仕事にも積極的に関わっていった。分科会の議論では頻繁に“Clarify”マークを提示し、争点の明示・共有・展開に努めた。言語の違いを越えた人間のつながりを探しているようであった。そこで気付かされたのは、本質的には、どのようなバックグラウンドがあっても、国籍が異なってもひとりの大学生・人間であるということである。その中で「共有」できる何かを見つけ出し、ぶつかったり認め合ったりする中で友情を育むことの素晴らしさというものをこの会議を通じて感じ取った。そして、日本側参加者・アメリカ側参加者を問わず切磋琢磨する中で、自分自身を磨き、見つめなおし、一回り成長することができたことをいまひしひしと実感している。

私は本会議中に1回だけ、沖縄で涙を流した。緑色に輝く珊瑚礁・一面に広がるさとうきび畑などの雄大な自然、に感動しただけではない。重い口を開いてくださった語り部の戦争の体験談に思いを馳せただけでもない。実は、12年前に家族で来た沖縄の地に舞い戻ったことに涙を流したのだ。そのとき一緒だった母は、昨年1月に病気で亡くなった。1年以上の歳月が過ぎて私は大学4年生となり、ひとりで生きていくことを実感するようになってきていた。一方で、一人っ子である私に注がれた母の優しさを嫌がり、素直になれなかった自分への後悔が募っていた。しかしながら、本会議で訪れた

沖縄からの平和のメッセージ、命の大切さ（命どろ宝）、そしてそれを幼少の自分に伝えようとしてくれていた親心というものを感じ取った。

「右も左もわからない幼い自分を、こんなに素晴らしい場所に連れてきてくれていたのか・・・」

自分の過去を静かな心で見つめ直すと共に、愛を沢山浴びて真っ直ぐに育った自分に気付かされた。12年間の歳月を経て、いまここで日米学生会議に参加し、成長した自分の姿を天国の母に届ける。平和の礎から沖縄の海風を浴び、流れ落ちる涙を止められなかった。私は自然と、

「今日まで生きていてよかった」

という感覚に陥った。日本中で活躍するピアニストだった母から受けた音楽の手ほどき、絶対に妥協しない精神、マッサージのツボ、人の痛みのわかる人間になること・・・本会議の中で輝きを保つことができたのは、元はといえば母のお陰である。自然と感謝の気持ちが湧き出で、自分に素直になれた瞬間だった。生きるエネルギーに満ち溢れる自分に気付いた。

ただ、今回の日米学生会議では、あまり前に出ず、裏方に回りながら周りの人を活かすということに努めた。その点、「完全燃焼したのか？」という発問に対しては快くイエスとはいえない。また会えると思って最後は号泣できなかったし、英語を使うことを躊躇してしまったことも何回もあった。まだまだ自分自身やれたのではないか、と思ってしまうのは確かである。ただ、自分の「ロウソク」としての生き様だけは貫けたような気がする。そして、日本側・アメリカ側参加者にそれが理解されたこと、ひとりの人間である「樋口 宏」として勝負ができたことは自分にとって大きな財産である。私の生き方に触れる中で他の人に僅かであろうとも何らかの影響を与えることができたのなら本望である。完全燃焼しきれなかった部分は、自分への新しい課題として、今後残された学生生活、そして人生の伸びしろと思って大切にしていきたいと思う。

ちなみに、この会議で一番嬉しかったのは、実行委員から、「ひぐポンを採用してよかった

わ！」と言われ、アメリカ側参加者に「来年もひぐボンと一緒に参加したいのに。」と言われたときである。自分の行動・生き方を通じて日米学生会議に少しでも貢献し、他の人に影響を与えることができた、という気がした。しかしながら私は、来年の実行委員を務めるために卒業と内定を辞退するという選択肢ではなく、社会人になるという決断をした。こう見えて気持ちはかなり揺れ動いたのだが、1年だけの参加であったからこそこのような価値のある思い出を作ることができたのだと思うと、来年以降ここで学んだ経験を活かして社会に向けてロウソクの光を灯していきたいと思いついた。これからは Alumni として活動を盛り上げて行きたいと思う。具体的な形はまだわからないが、外側から貢献できる何かがあると信じているからこそ。

“Do your best, and it must be first class!!”
(最善を尽くせ、しかも一流であれ)



福田 愛奈

「真剣に楽しむこと」「メリハリをつけること」
— 会議を目前に心に決めた。

滋賀、バラバラの学生とゴタゴタの両国実行委員、順風満帆とは言えないスタート。実行委員の1年間の願いがねじれて具現化した焦燥感をよそに、次々と予期せぬ問題や收拾がつかないかと思われた衝突やすれ違いが生じた。しかし、準備活動中とは異なり、早く終わってほしいような、逃げ出したいような気持ちは不思議ともうなかった。ハプニングも含め1つ1つがついに実現した第57回日米学生会議そのものであ

り、同時にその1つ1つが生かし次第で大きな成長する芽である。笑ってしまうほどギッシリ詰まった毎日の中で、力の入れ方と抜き方、日米で異なる意識や組織運営方法のギャップの埋め方、対集団と対個人、また実行委員でありながらも会議に参加する一員であること、こうした諸々の両立や調整の術が見え始めた頃から徐々に楽になった。1年間、1週間、前夜、と細かく練りつめた1日が昨日となり、過去となり、驚く速さで流れていった。気づけば、わたしが囲まれていたのは参加者の面々の何かが吹っ切れた笑顔だった。

広島、建ち並ぶビルの中で小さく感じられた原爆ドーム。座り込みやビラ配りで平和を訴え続ける国籍を超えた人、圧倒され涙する人。人の声で賑わう真夏の昼、刈りそろえられた芝生に平和記念式典に向けて整然と並べられていく無数のイスを眺めながら60年間の意味を考えさせられた。

沖縄、完結していない悲劇の傷跡と復興の軌跡。大きな空には炎も国境も見えなかったが、米軍航空機の騒音が響いた。バスで隣になった米国側の友人は「話好きの祖父は沖縄戦の経験だけは語らない」とボソッと言った。空も海もあまりにきれいで、人はあまりにむごい。それでも周囲の澁澁とみなぎるエネルギーや静かな強さと深い優しさを目の当たりにし、言葉では何も語れない無力感を知った。

東京、会議の集大成としてのフォーラムを含む10日間におよぶ最終サイト。そのコーディネーターだったわたしは本会議が始まってからも抱えたおもりを日本のどこにも置いて来ることができず3週間近くひきずり回していたように思う。

「いっぱいいっぱいな時こそ平静に笑顔」— 思えば会議中、何度も自分に言い聞かせていた。東京入りした瞬間からそびえる困難と仕事量の多さに辟易する隙もなく奔走し、まさしくいっぱいいっぱいになりそうだった。しかし、わたしはおそらくヘラヘラしていた。自分から安心の輪を広げようと思い、ここからは上がるしかないと思いきや、寝不足でオツムが弱体化していたからであり、いつからかプレッシャーも心地悪くはなくなっていた。またあらゆる難局を想定して1人で切り抜けられるものとは考えないようにし、謙虚さと柔軟性を忘れずに東京

サイトを満喫した。仲間と過ごす毎日という本番の積み重ねこそが最終サイトを作る。おもりの正体はエンジンだったのかもしれない。

フォーラムも無事盛況のうちに終わり、その翌日、希望者を募って富士山登山を敢行した。雲に向かって登っていくほど街の光は小さく、星は大きくなってゆき、大きい何かが遠ざかっていくような不思議な感覚に襲われた。天候に恵まれず頂上は断念せざるを得なかったものの、日の出にはつねる寒さと一緒に雲はさらわれていき、見事に晴れた。丸ごと飲み込まれそうだったあの朝の思いも光景も、表現するにはまともな言葉は役に立たない。下山し、バスで戻り、急いで支度した。1時間後には閉会式が始まった。

「 」 — 夏が終わった。
この1年を消化するには1ヶ月は短すぎ、ましては紙に収めるのは無謀で乱暴ともいえる作業である。記憶を辿れば懐かしく苦い思いが複雑に絡み合い、燃え尽きたような虚無感に何度も筆が止まる。わたしが日米学生会議とその人々に出会い、衝撃を受けたのは2004年、19歳の夏。感謝の気持ちあふれるその夏の終わり、1人でも多くの人にこの機会を与えたいという真っ直ぐな思いと、つないでいく使命感を抱いた。背中を押してくれた友人もいた。わたしが実行委員になるには、これで十分だった。しかし、1年間を通して、自分の中では必ずしも情熱だけではなく、相対化と客観化を経て第57回日米学生会議は形になっていった。「国際交流」が何ら珍しくないグローバル化する地球で、良好といわれる日米関係のうちに育ったわたしたちが多くの方々に支援され、また大きな機会費用を払い、今集うことにはいかなる意味があるのか。この夏も参加者の数だけ異なる答えが生まれたことは言うまでもない。

思えば、息切れ寸前で駆け抜けた。2004年夏のスタートラインと2005年夏のゴールはわたしの足元にスタートラインをもう1本ひいてくれた。今日からの道の手がかりは、手元に残された今はまだ整理のつかない思いと紙の山。日米学生会議じゃなきゃダメだった。

未熟なわたしは会議中のみならず、多くの方々にご迷惑をかけることもあったに違いない。日米学生会議の57回目の実現のために、辛抱強

くご指導下さった皆様、ご多忙の中ご協力下さった皆様、批判して下さいの皆様と応援して下さいの皆様に、改めて心から感謝を申し上げたい。もちろん、集まってくれた主役のみんなにも。

藤原 智生

「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」この壮大な理念の下に開催される日米学生会議。

しかし、本会議中で感じたことは、その理念に対して自分の無力さであり、自分たちの無力さであった。

この一ヶ月のまとめであるフォーラムで自分たちの議論のアウトプットとして政策提言を行ったが、残念ながらそれが社会に対して影響力を持つとはいえなかった。

それならばこの一ヶ月間、日米学生会議の意義とは何であったのだろうか。

今の時点で私が言えることは、この会議を通して参加者同士がお互いに刺激しあうこと、他の参加者と自分の相対化による自己の再発見、そして J A S C er という絆を作るということである。

刺激と自己再発見。

私にとって、この一ヶ月間は毎日毎日が刺激と発見の連続だった。

英語が得意ではない私にとって、他の参加者の使う表現、意見の構成方法、スピーチ等を聞き、自分への劣等感にさいなまれながらも、「いい」と思ったことは次から自分でも使えるようにと、必死にメモを取った。

また、数あるイベントを作り上げていく中で、リーダーシップをとるのが得意な人、通訳に優れている人、周りを盛り上げるのが得意な人、人それぞれに輝くモノを持っていた。その中で自分はどの部分でこの会議に貢献できるのだろうと、自分の中の引き出しを引っ掻き回した。しかし、私は、結果的にはあまり会議の運営に対して貢献できたとは言えず、その悔しさはいまだに残っている。

J A S C er という絆。

一ヶ月間、24時間、気がつけば誰かが隣にいる、そんな環境で一ヶ月を共有することで得られ

る不思議な感覚と絆。お互いの話し方や癖、しぐさ、好き嫌い。いい面も悪い面も見えてくる。時間を忘れて政治や、恋愛について語ったり、時にはくだらない遊びを試みたり、そんな非日常的な時間、空間を共有した感覚、そして絆は簡単には失われるものではない。

そして、未来への可能性。

「J A S C は夏の一ヶ月間が終わってからが始まり。」

本会議中 E C や A L U M N I の方から幾度となく聞いた言葉。私は、この言葉の意味がつかめなかった。

しかし、本会議が終わって3週間たった今、その言葉の意味が見えてきた。

本会議は終わってしまったが、未だにメーリングリストやチャットなどを使って参加者同士のコミュニケーションは続いている。そしてこれからも続いていくであろう。このように、この夏の一ヶ月間で築いた絆をもとに、参加者はこれからも本会議同様、お互いに刺激し合い、高めあう。

そして、それが結果として、この会議の理念にあるような、世界の平和の一翼を担う人材を作り上げるのではないか。

今の私には、これが日米学生会議の真の意義であるように思える。

夏の一ヶ月は終わったが、これからも私の、私たちの日米学生会議は続いていく。

そう確信している。

最後に、みんなありがとう。そして、これからもよろしく。

ダラ プスピアルディニ

今思えば一ヶ月間赤の他人 79 人と合宿生活することは一生できるかどうかの体験だった。

J A S C への参加は、ただの夏休みの一部のつもりだった。でも、今 J A S C は今後の「私」という人物を形成していくのには欠かせない出来事かと思っている。

いったいの J A S C は何だったのだろう。去年の報告書を読んで、J A S C が終わってこの疑問を投げかける参加者は多かった。同じ質問を自分に問いかけてみて、何を答えるかというよりもどう答えるのかが分からない。J A S C での一ヶ

月間で、何も得られなかったわけではない。JASC で人と出会い、仲間がつくり、友情を築き、一緒に何かを作り上げ、仲間と語り明かした日々。それでもまだ消化できていない事柄が多すぎて、私は「モヤモヤ」する気持ちを抱えたまま九州に帰った。

JASC の始まりを思い返してみる。

私は日本に7年間も住んでいるのだが、日本人の集団とは何年かけてもなかなか馴染めない。JASC の前に他の国際的な学生会議に参加したことがあるのだが、やっぱり周りの空気と自分の空気がマッチしないことが多かった。JASC に応募した際に、今までの経験からまた周りに馴染めない自分の姿を想像していた。でも、春合宿のときに初めて他のメンバーと顔を合わせ、何でも話をした。気づかぬうちに私は自然に全体の一部になって私の一部が少しずつ全体に包み込まれていた。

本会議が始まったときは、正直に言うと焦りと情熱と興奮と期待が入れ混じっていた。自分の英語力でグローバル化や経済について語る自信がないと気づいている割には本会議までに自分の足りないところを埋めようとする努力が足りなかった。その一方、自分と異なるバックグラウンドを持っている人たちとどんな話ができるのか、どんなものを得られるのかと胸に期待を膨らませていた。このように、すっかりしなくて「モヤモヤ」した気持ちで私の JASC は始まった。JASC ではアメリカ側と日本側の参加者と戦争、平和、教育、ジェンダー、仲間、恋愛などについて時には表面的に、時には深く語った。自分なりにみんな一人ひとりを見つめることができた。また、一ヶ月間家族から離れ、毎日みんなと接していくうちに自分がどんな人間のかを周りのみんなが私に気づかせてくれた。みんなに感謝の気持ちでいっぱい！！

私は他のメンバーから多くの刺激、勇気、感動をもらったが、自分にはそれを完全に消化できないことが多くて今の段階では自分の思いを言葉に紡ぐことは難しい。でも、一つだけ確かだと思えるほど強烈な思いが自分にある。JASC にみんなが一人ひとり関わっていく際に、また、自分も JASC をつくりあげるその一員になった際に、何かあるいは誰かに対する一人の思いが

見る見るうちに形になっていくことがとても素晴らしく思い、強い希望を感じていた。

JASC が終わって、JASC が始まった時と同じように「モヤモヤ」していた。それは、おそらく JASC 中でやり残したことが多かったからだ。でも、この「モヤモヤ」が逆にこれからの自分の原動力になると思う。



古川 啓之

60年前、日本と米国は壮絶な戦争を繰り広げていた。唯一の地上戦が展開された沖縄では沢山の方が犠牲になった。広島と長崎には原爆が投下された。両者は敵対関係にあった。

60年後、日本と米国は、世界でも最も優良とも言える同盟関係にある。そして米国に対して好印象を持っている日本人が多いこともまた事実であろう。

あれだけ敵対し、沢山の犠牲を払った戦争をしたにもかかわらず、今日では世界一の仲良し。そんな状態にある両国の関係が、私にとっては不思議で仕方なかった。どうして今こんなにも両国は友好的なのだろうか。

ヒントを得ようと、同居している90歳の祖母に終戦の時のことを聞いてみたことがある。祖母はこう答えた。「終戦とその後の変化があまりにも劇的過ぎて、民主主義など新しい概念について不思議に感じる余裕すらなかった」と。

なるほど、たしかに終戦という出来事は、それまでの日本を根底から覆すものであった。劇的な変化に加え、その変化に対応した日本人特有の適応性と勤勉さもあいまって、日本は新しい体制へと変わって行ったのだろう。

今回、日米学生会議で、広島と沖縄を訪問した。被爆者の方、戦争体験者の方にお話を伺う貴重な体験を得た。つらく思い出したくもないであろう体験であるにもかかわらず、落ち着いて当時の様子を話してくださる姿に頭が上がりなかった。私は、お話を伺う度に、なぜそのようなつらい経験をお話くださるのか、質問した。返ってくる答えはいつも同じだった。「もう二度と自分が体験したような残酷なことが起こって欲しくないから。」

なぜこのような気持ちになるのだろうか。60年という月日がそれをもたらすのだろうか。それだけではないだろう。憎しみや時間というものを超えて、それらでは表せない、悲惨な経験を繰り返してはならない、という純粋な願いが込められているのだ。

沖縄では、北部の本部町にホームステイをする貴重な機会を得た。印象に残った単語がある。いちやりばちよーで。一度会ったら、家族になる、という意味である。「日本に軍隊はいらない。なぜなら、いちやりばちよーで、だから。」こう地元の方はおっしゃった。

私は、この言葉に、お話し下さった方々に共通する気持ちが凝縮されていると感じた。この言葉自体の意味は上述した通りであるが、その背景にある精神が共通しているのではないだろうか。

国籍や文化が違って、同じ人間として、互いを理解し、共に生きていく。そこに、対立は存在するかもしれないが、その対立は武力を持たずして解決可能である。そして、武力を用いた解決方法は必ずや多くの悲惨な結果をもたらす。だから、そのような解決方法をとってはいけない。

では、結局なぜ日米両国はこのように友好的なのだろうか。

もちろん冷戦という大きな国際政治の流れも要因の一つであろう。しかし、このようなマクロの要因だけではない。悲惨な経験を繰り返してはならないという思い、さらにはその思いを具現化する努力、これらのミクロの要因も少なからず影響しているのではないだろうか。一人一人の気持ちがこの友好関係を支えている、お会いした方々から私はそう感じた。

そして、私たちもまた、日米学生会議参加者として、これからの日米関係を担う「一人」と

なっていかなければならない。大げさかもしれない。しかし、一人一人の小さな気持ちと努力なしには、大きな果実は実らない。この会議は、まさにそのスタートなのだ。

いちやりばちよーで。この言葉に込められた魂を大切にしていきたい。

前田 薫

-JASC は私にとって大きな「スタート」である-

私は大学で ESS という英語のクラブに所属し、二年間ディスカッションやディベート活動を行ってきた。JASC に応募した理由は、二年間 ESS で鍛えた英語力を試したい、9月からの一年間の中国留学に向けて日本理解を深めたいという思いからだった。

しかし現実には甘くなかった。アメデリの英語は早すぎてよくわからず、海外留学経験者や帰国子女のジャパデリが、アメデリと楽しそうに話しているのがうらやましくてしょうがなかった。私は移動中のバスの中や見学中も常にアメデリと一緒にいて積極的に話し、英語がわからなくてもできるだけアメデリと一緒にいるようにした。そのおかげで徐々にアメデリの言うこともわかるようになり、会議の後半からは通訳に挑戦したり、RT でも積極的に発言したりできるようになった。

そして今、私は一年間国際政治を学ぶために中国の大学に留学に来ている。中国に来る二日前 JASC のメンバーがお別れ会を開いてくれた。その最中アメリカに戻るあるアメデリから電話がきた。「今成田空港にいるんだ。薫と出会えてよかった、ありがとう。」メッセージで「君の中国での経験の全てをぼくに教えて。僕のインドでの経験を全て教えるから。」と言ってくれるアメデリもいた。他にも多くのアメデリから議論ができて楽しかったという手紙をもらった。今でもたくさんアメデリと、もちろんジャパデリとも連絡を取り合っている。

JASC で知り合った大切な仲間たち。とことん私の話に付き合ってくれた仲間や夜遅くまで語り合った仲間。「彼らとずっと語りあいたい。JASC では伝え切れなかった私の思いを伝えたい、受け取れなかった彼らの思いを聞きたいから。」そのために中国でも英語の勉強を続け、留学経験を通して自分の考えをもっと成熟させたいと思う。

さらに私に課せられた役目。それはここ中国で、JASC で得た経験を中国の学生に還元すること。JASC のように、いやそれ以上に中国の学生と政治・経済問題、国際情勢について議論をしてそれを JASC の仲間や多くの人に伝えたいと思う。

-JASC は私にとって大きな「スタート」である-

三谷 佳孝

2004年の夏、プリンストン大学で第57回会議の実行委員に選出されてから一年が経ち、第57回会議もこの報告書の発行により無事に終了の運びとなった。この一年間に味わった喜怒哀楽の感情は、とても言葉では簡単に表現できるものではないが、第57回日米学生会議に関わってくださった方々に感謝の気持ちを表す為、また人生の中での21歳を振り返る将来の自分自身の為に、この文章を記したい。

実行委員の活動は昨年の会議が終了した後の9月から本格的に始まったが、私が実行委員になってから常に意識してきた事がある。それは唯一の地方実行委員として、私にしかできない役割を果たす事であった。役割とは何か。1、地方（主に関西の活動）を取り仕切る。2、東京の実行委員に劣らない活動をする。3、地方参加者の立場から意見を出す。ことが挙げられる。私は、京都の大学に通いながらも東京の実行委員に劣らない活動をこなしてきた自負はあるつもりだ。しかし、距離に起因する疎外感や無力感を完全に克服する事は出来ず、活動中に被ったフラストレーションは計り知れない。情報の不足や、細かい決定に関われない事は仕方がなかったが、小さな不満が大量に溜まると苦痛を覚えた。しかし、比較的東京を訪れる機会を多く与えられたのは不幸中の幸いであった。

実行委員としては広報、選考、そして滋賀京都サイトコーディネーターの役職を任されていた。広報は同じく実行委員の荒島と二人で担当してきたが、今となっては様々な思い出が駆け巡る。私と荒島は性格的にはほぼ正反対であった。どちらかと言えば私は慎重で保守派。荒島は大胆で革新派であった。そして幸か不幸か我々は広報活動に対し強いこだわりを持っていたため、お互いの案を譲ることを余りせず、

衝突の連続であった。しかし、今となってはその衝突のお陰で、結果的には効果的な広報活動を行えたのではないかと思っている。出来上がった広報媒体や活動を見直しても、荒島の斬新的なアイデアと作戦は有効的であったのは間違いない。しかし、私が細かい配慮を忘れなかったことも大事であったろう。東京滞在中に荒島家で夜が明けるまで二人で作業を続けたことも、今となっては良き思い出である。広報活動は実行委員一丸となり頑張った活動であると言えよう。私自身も毎日、リーフレットやポスターを持ち歩き、様々な大学を巡った思い出が忘れられない。365日間 JASC という文字を忘れた事は間違いなくない。

広報活動が一段落して間もなく、選考の準備が始まった。前年の反省より第57回の選考は形態を大幅に変更して行われる事になった。細かい事を伝えることはできないが、我々が採った方法は正解だっただろう。選考の準備はとにかく細かい事が多いため、面倒な作業が多かったが、同じく選考担当者だった出浦の要領の良さにも多に助けられ、準備期間を乗り切る事が出来た。実際の選考は学生である実行委員にとって大きな挑戦であったが、この経験から多くの事を学ぶ事が出来た。また、この時期は私自身が就職活動をしていた時期でもあったが、面接を行う立場を経験し、その後の自分の就職活動に活かす事が出来たのは、私自身にとっても非常に有意義だった。選考後には一週間の選考合宿があり、実行委員だけの共同生活が行われた。選考という最大の目的はあったものの、実行委員同士の人間関係も深められた思い出深い一週間である。

ゴールデンウィークには参加者との初対面である春合宿が行われ、本年度の参加者が一同に会した。受験票の写真とにらめっこを続けた顔全てが、リアルに同じ空間に同居している現実を受け止めるまでに少し時間がかかったが、実行委員としてのこれまでの活動に間違いはなかったと確信し、本会議へのモチベーションは更に上昇していく一方で、迫り来る本会議の準備へのプレッシャーも重荷に感じてきた時期でもあった。

就職活動が最終的に終わった五月末から本会議開始までの私は全力をサイトの準備に注いだ。私が最終的に場所を設定した滋賀、京都

という場所で、更に自らの通う大学で日米八十名の学生を招き、会議を行うということは、学生の身分としては願ってもない機会であり、学生最後の大舞台としてこれ以上のものは無かった。滋賀、京都サイトでは、歴史と未来と言う二側面を持った本年度テーマの后者に結びつき、更に地域性に関連した「環境」というテーマに設定し、シンポジウム型のプロジェクトを開催することが決定していた。このプロジェクトは構想だけが先行し、中身が定まらないまま春合宿に入ったが、ここで募った参加者のスタッフ、通称「デリスタ」の多大な貢献と協力により可能性を大きく膨らませていった。デリスタの面々はそれぞれの長所を最大限に活かし、プロジェクトの骨組みを組み立て、全体を補強していった。私は現場の監督になり、強固な信頼を持ちながら全体を見渡すことが出来た。そのお陰で、プロジェクトでは大学教授、企業、高校生を招き、日米両国の学生によるプレゼンテーションを行うボリュームのある企画となった。プロジェクトに関して詳しくは別項で見て頂きたい。米国学生のプレゼンテーションにあたり、アメリカ側実行委員の Lucky とプロジェクトの方向性を決め、何度も打ち合わせを行ったのもやりがいがあり、貴重な体験であった。私なりにこのプロジェクトの最も大きな意義は、日米両国の学生が会議前から周到に準備し 50% / 50% の関係で発表を行えたことにあると考える。日米学生会議という名前はあるものの、言語や準備の面から日米の学生が対等にまとまった意見を表明できる場は、最後のフォーラム以外では難しいものである。特に、日本開催の会議では日本側実行委員の負担が過大なため、このような機会を行う事が難しい中で作り上げることができた事は、非常に有意義であったと感じている。プロジェクト本番では、デリスタ以外の多くの参加者も積極的にプロジェクトの成功に尽力してくれた。ただ、準備の面で至らないところがあり、スタッフの負担が多くなってしまった事を詫びたい。最初のサイトであり、会議に慣れないまま行ったプロジェクトであったが、無事に終了した今ではこの機会を可能にくださった全ての方々に感謝の念を述べたい。

サイトではその他にも、オープニングセレモニー、文化プロジェクト（京都国際学生映画祭の受賞作の上映、能の上演、体験）、京都での宿坊体験、散策を行い、最終日には阪神大震災

から十年を経た神戸を訪れ、地震大国日本の現状を学んだ。私は一週間の行程の中で私が生まれ育った、関西という地域の歴史、現在を最大限に表現しようとした。参加者に地域特性を強く印象付け、地域が抱える様々な問題を感じ取ってもらえたならば報われる。

その後会議は広島、沖縄、東京と続いたが、実行委員という立場、日本で開催されているという状況を差し引きしても、昨年参加した会議とは余りにも雰囲気の違いに戸惑い続けた。しかし、自分で日米学生会議のイメージは 56 回会議に強く影響されており、この会議に定まった形はないということ割り切れるようになってからは、今年の日米学生会議を徐々に受け入れられるようになっていったが、会議が終わりに近づくにつれ複雑な気持ちになり、苦しくなってしまった。最終日前日には体調を壊してしまった。そして最終日、米国側参加者との別れの際に、その気持ちが一気に膨張し破裂した。気がつけば泣き喚きながらバスを追っていた。行ってしまえば楽になった。この複雑な気持ちはここで表せるものではないし、表すべきものではないだろう。実際、今でも腑に落ちていないのである。ただ、私の中の葛藤の塊であるとだけ言っておこう。

こうして、実行委員としての第 57 回日米学生会議は終了した。会議の開催にあたって個人的に特にお世話になった立命館大学の浅野様、山本様をはじめご協力、ご指導くださった方々には本当に感謝してもしきれないくらいである。そして、一年間の活動を通じて切磋琢磨し合った同じ実行委員たちには本当に感謝しており、これからも刺激し合える良い関係を築いていきたい。参加者の皆とは、これから更に人間関係を深めていきたい。日米学生会議ではよく言われるが「会議の終わりが始まり」なのである。

第 57 回会議の終わりには、第 58 回の実行委員が選出されており次年度の開催が決まっている。近年、日米関係が非常に良好な中での日米学生会議の在り方、使命が問われている。今年の会議では中国企画を行い、日米間ではなく中国を加えた日米+1 の企画を開催し、その流れからか、次年度の会議もグローバルな世界の中での二国間の役割を見据えているようであり、これは非常に結構なことであると思う。し

しかし、私が経験した二度の会議の中で、日米間での学生がそれぞれの国に関する議論を行い、十分に相互理解ができたかと思うと、そこには疑問を感じざるを得ない。つまり日米間でも十分と思わないのだ。参加者の語学力は問題ないと思う。今や日米の学生が話す機会がありふれており、会議の重要性は過去と比べるほどのものではないし、今年に限って言えば、参加者が日本という環境に甘えたようにも感じた。そのような中で会議を続ける意義はどこにあるのか。今まで以上の二国間の相互理解を目指し、文字通りの意味での「日米」学生会議を続けるのか、日米と第三者の関係を模索する会議となるのか、それとも創設当時のように革新的な「日米学生会議」になっていくのか。これからの時代と世代が答えを見つけよう。

森 賢子

JASC は夢のようにやって来て、そして過ぎていった。

学生生活も残り一年、最後に学生でなければできない何かをやってみたいと思っていた私は、以前の参加者である友人から「日米学生会議」の存在を聞き応募はしたものの、まさか本当に自分が参加できるとは思っていなかった JASC。日本人であるにも関わらず、あまりにも日本やその歴史について無知な自分。JASC を通して、日本各地を巡り歴史を感じ、またそれをアメリカ人の仲間たちと共に経験することで、自分のバックグラウンドや日本人であるということを新しい視点から見つめなおすことができるのではないかと考えたのが JASC に参加した一番の理由だった。

春合宿で日本側の参加者と初めて出会い、皆の意識の高さに刺激され本会議に向けて準備を進めていく決意を固めたものの、就職活動などで事前勉強会には殆ど参加も出来ず本会議を向かえることになってしまい、出発の日には不安に押しつぶされそうな自分が居た。しかし、そんな不安も久しぶりに会った日本側参加者の笑顔、そしてなによりも分科会メンバーの温かさに励まされ、少しずつ和らいでいった。

JASC で過ごした一ヶ月を振り返ると、それは様々な形での異文化体験に溢れていた。アメ

リカと日本という枠には収まらない、戦争や平和といった世界観、そして参加者一人ひとりのもつ価値観や人生観等、私にとっての様々な異文化が私に語りかけてきたことは計り知れない。言葉でうまく表現することはできないが、この異文化体験により、物事に対して今までとは違った感じ方をするようになった。

学生最後の夏は JASC により、私にとってより特別な夏になった。英語にはさほど問題はないだろうと思っていたものの、通訳が全くできなかったことや、JASC に十分に貢献できなかったことなど、一ヶ月という限られた期間の中で消化しきれなかった部分も沢山残る。しかし、JASC is just the beginning. JASC での経験を大切に胸で暖めながら、今後 alumni として JASC を自分なりに支えていく道を探すことで自分の中で JASC での経験を完成させていきたいと思う。

最後に、奇跡的に一メンバーとして JASC に参加できたことを本当に嬉しく思うとともに、私にそのような機会を与えて下さった協力者の方々をはじめ、57回の EC のみんな、そしてメンバー一人ひとりに感謝の気持ちでいっぱいです。



山内 拓磨

JASC が終わった日、一人鈍行で京都に戻った。新幹線ではなく 9 時間もの時間をかけて自分の「居場所」に帰ったのは、なかなか自分自身の reflection time が取れなかった JASC 中に感じたことを、漠然でもいいから整理したかったからだ。JASC が終わって一ヶ月以上たち、こ

の感想の提出も大幅に遅れてしまっているが、車窓の外を見ながら率直な思いを走り書きしたキャンパスノートを久方ぶりに開きながら、私なりの会議への思いをまとめたと思う。

大学生活を通して学生会議の運営に関わってきた私にとって、JASC は自分が責任を負っていた会議とは違うことができる、「新しい場所」だと期待していた。分かり合うという過程には時間が必要である。私が運営してきた会議はイラク、アフガン、イスラエル、パレスチナなど世界の紛争地から学生を招致し対話の空間を創っていたが、滞在日程は長くても1週間程。「対話」や「理解」という言葉は、より深い付き合いと時間をかけて、成熟させていくべき概念だと思い、JASC への参加を決めた。言ってしまうと上っ面の対話を越えたところに何かがあるのか、それを自分で確かめたかったのだ。

会議が終わって、その答えの一端を掴んだ気はした。それはぼんやりとしていて言葉にはまとめきれないのだけれど、まずそこに参加した意義があったように思う。アイデンティティとは他者がいることで成り立つ自己であるから、差異はあって当然である。その差異が国家や国籍、宗教や文化からもたらされるのではなく、それを超越したその一個人から認識した瞬間、世界は違って見える。もちろん国家や文化が一個人の人格に無意識に影響を与えているものだが、それすら偏見なしに受け入れることができた瞬間、小さくても強固な一つの輪を、国境を越えて作り出せたように感じた。JASC を通してその輪を増やすことができたのではないか、それが一つの結論になるのかもしれない。ただしその感覚は決して私にとって新しいものではなかったようにも思う。

もしかしたら、「日本開催であること」が大きな意味を持ったかもしれない。アメリカ開催の方が参加希望者は多いという。外国に安く行けるのだからそれは当然なのだが、私にとっては自国での開催だったことで学べた点が多くあった。戦後 60 年目の今年、日米間を中心とした太平洋戦争の意味を改めて検討する必要性は、メディアなどから盛んに叫ばれていた。21 歳の私にとって、40 年前に終わった戦争を肌で感じる機会はない。ヨーロッパと違い冷戦構造から未だに完全に抜け出せていない東アジアでは、確かに半世紀以上前の戦争が禍根を残しているが、現在の国際社会が抱える問題と絡み合い、各国とも決して純粋に過去の戦争を

直視しているようには感じられなかった。そんな中で原爆の被爆者の方やひめゆり部隊の生き残りの方と会い、自分の想像の及ばない戦争の記憶というものに触れたことは、大きな衝撃であった。同時に、「過去」としての戦争だけでなく、米軍基地や靖国神社など、戦後 60 年を経た「現在」も関連する問題が私達の頭を頑固にし未来への足取りを重くしているのがあって、決して 21 歳の私が無関係ではないことを身を持って感じた。私の専攻である国際政治においては、物事の表面をさらうのではなく本質を見極める努力をすることや、多極的に現実的視点を持つことが求められる。JASC 中は、語り部達や辺野古で米軍基地移設に反対し座り込みを行う人々の率直な思いを前に、「現実的視点」を持つことに罪悪感と空虚感を感じた。当時の戦争の背景に自説を展開し、日本の安全保障の観点から基地移設の必要性を説くことは何の意味もないように思われた。そして私の故郷、山口県岩国市も厚木基地からの部隊移設受け入れに伴い、受験生の頃苦しめられた夜間発着訓練の数は増えることが確実だという。もちろん、基地移設に反対し座り込みを行い、核の恐ろしさを発信することだけが真実ではない。しかし私が安全保障を語り日本外交を語る際は、ひめゆりの方、被爆者の方、辺野古の方、そして故郷岩国で騒音に苦しむ人々のことを忘れてはいけなく強く思った。それがどんな意味を成すのかは分からないが、辺野古の活動家の方がおっしゃっていた言葉を忘れずにいたい。「国家あつての安全保障じゃない、国民の安全な生活あつての安全保障だ」。

米軍基地の話をする際、私達の目は沖縄に行きがちだ。しかしその問題を抱えるのは岩国市を含む他の地域でもある。同じことは戦争の被害者という文脈でも言うことができる。被害者はもちろん被爆者でありひめゆりであるが、日本が侵略したアジア各国の人々も同じように辛酸を舐めた。つまり戦争を語るとき、私達は狭い視野で被害者になりたがる。その経験一つ一つは尊重しながら、国際政治で求められる幅広い視野はここで必要になるはずだ。

帰国子女のジャパデリが多い中で、いい意味でも悪い意味でも私には日本という国しかない。それは偏狭な考えしか持たないという意味ではなく、日本という国に無限の関心を持ち、この国の行く末を主体的に考えるという意味であるに違いない。フォーラムでも述べたが、この目で見えてきた様々な問題に対し、「私に何

ができる」のか。思えば学生会議に関わり始めた大学1年の頃から、その答えを探し続けてきた。JASC もその答えを探してきた道の延長線上に存在したが、ただ存在しただけでなく確かな動機付けを私に与えてくれた。おそらく日本開催でなければそう強く感じることはなかったのではないか。もちろんアメリカ開催に参加していない私にはその答えは定かではないが、「国際」政治を専攻する中で自分の「足元」に対し注意を疎かにしていた私にとって、JASC が大きなきっかけとなったことは間違いのないことである。

学生にできることは何か。学生と社会人の過渡期にある一大学院生として、問い続けてきたこの質問から一歩進み、「何がしくて、何になっていくのか」に探る答えを移して行きたいと思う。そのベースには JASC があり、日米関係があるのかもしれない。

新たな過程を歩き出すのに貴重な機会を下さった 57th の EC を含む JASCer のみんなに感謝したい。また飲もう、また語ろう、何十年経っても。

山田 裕一朗

2005年4月、一枚の送られてきた封筒、その中にある書類は自分が日米学生会議(=JASC)に参加できない事実を伝えていた。「補欠合格」。

JASC に参加したいと思った理由は大きく 2 つある。

- (1) JASC という今まで自分が経験してないであろう空間で自分を成長させたいと思ったから。
- (2) アメリカ合衆国という国が嫌いであったから。

補欠合格であった理由は、いくつかあるのだろう。しかし、(1)のような思いは抱いていたが、JASC に対して貢献できることについて、明確な意見は持っていなかったのは事実だ。おそらくその点が欠けていた。

だから私は、運良く、JASC に参加できる事が決まった後、JASC に対して貢献できることは何かを考えた。そして、その時自分が抱いた

思いを、京都在住であったこともあり、実際に企画・運営に参加できた環境プロジェクト(本会議中7月30日滋賀にて開催)に詰めることにした。それは、環境という普段は学者やNGO、政府機関などによって語られることが多いトピックに、そういった学術的・政策的な視点だけでなく、実際に環境問題に深く関わっている企業の視点を取り入れることだった。結果的に、JASC に貢献できたのかは分からないが、しかし、70年以上続く JASC という存在に対して、自分の中で、新しい風を発することができたのではないかと考えている。

また、JASC に参加したい動機となった2つ目に上記(2)の理由がある。JASC に参加するまでの学生生活は、旅行がメインで20カ国程度、東南アジア・中東・ヨーロッパを中心に回ってきた。それらの経験を通してアメリカに対する世界の目の厳しさを実際に感じたこと、さらに政治的にもアメリカは好きではなかった。従って、かねてより同世代のアメリカ人と話してみたいと思っていた。

今、JASC を振り返ってみても、まだ明確な感想を抱けない。自分が得られたもの、そして経験したこと、それらはとてつもなく大きなものであると同時に、それらが今後の自らの人生にどんな影響を及ぼすのか現時点では計り得ないものなのだろう。57th JASC が終わること、それは自らの人生の日記一冊分が終わり、また新品の日記を購入しなくてはならなくなった、そんな思いを抱かせるものであった。そして、これから 58th JASC のページを埋めていく日々を送ることになる。

最後に、滋賀で共にプロジェクトを企画・運営した仲間、京都で落ち込んでいる自分を励ましてくれた仲間、広島で共に戦争とは何か語りあった仲間、沖縄で降り注ぐ太陽と夏を共に感じた仲間、東京で1ヶ月の思いを共有し合い最後に別れを惜しんだ仲間、JASC を通して出会えた仲間、これからも大切な仲間だ。